

梅林遺跡

第4次調査

—一般国道202号福岡外環状道路、及び
福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査報告5—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第781集

2003

福岡市教育委員会

梅林遺跡

第4次調査

—一般国道202号福岡外環状道路、及び
福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査報告5—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第781集



2003

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面した福岡市は、古くから大陸との交流が盛んで、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。この中でも特に博多湾西部に面した早良平野は、弥生時代のクニの形成を示す早良王墓や大型建物跡を発見した吉武高木遺跡、また古墳時代の前方後円墳、奈良時代の早良郡衙跡など貴重な遺跡の発見が相次いでいる地域です。しかし、近年は市街地化の拡大と共に埋蔵文化財の発掘調査も増加している地域もあります。

福岡市教育委員会では、平成3年度より一般国道202号福岡外環状道路予定地の埋蔵文化財の試掘調査、及び発掘調査を進めており、発掘調査は平成3年度からIV工区から着手し、賀茂遺跡の古墳時代井堰跡をはじめとして、これまで発掘調査を行ってまいりました。

又、外環状道路のIII・IV工区は、福岡市交通局が計画している地下鉄3号線建設区域と重なっており、計画の進捗に合わせて平成9年度にはIII工区の城南区梅林地域の発掘調査を実施しました。

本書は、平成11年度に実施した梅林遺跡第4次調査の成果について報告するものです。この発掘調査では、縄文時代の埋甕や古墳時代～奈良時代の集落等を発見しました。これらの遺構は、早良平野の歴史的経過を解明する重要な手がかりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成15年12月25日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　　言

- (1) 本書は、一般国道202号福岡外環状道路（以下外環状道路と称す）、及び福岡市営地下鉄3号線（以下地下鉄3号線と称す）建設予定地において、福岡市教育委員会が国土交通省（旧建設省）九州地方建設局福岡国道工事事務所、及び福岡市交通局の委託を受けて平成11年度に実施した発掘調査報告書である。
- (2) 本書には、外環状道路Ⅲ工区において実施した城南区梅林所在の梅林遺跡第4次調査の成果について収録するものである。
- (3) 発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課所属（当時）の井澤洋一が担当した。
- (4) 本書に掲載した遺構平面の原図（縮尺1/20）、その他の遺構平図・断面図、土層実測図等の作成等は、井澤・植崎直子、藤崎真歩、田中昭子、上野道郎が行った。合成図等の作成は、藤崎が行い、一部を「株式会社埋蔵文化財サポートシステム」に委託した。
- (5) 本書に掲載した遺物実測は、土器を田中・藤崎が行い、石器については、「株式会社大成エンジニアリング」に委託した。
- (6) 遺構・遺物の製図は、藤崎・山浦学が担当した。
- (7) 遺構の写真撮影は、井澤が行い、遺物撮影は、「有限会社フォトハウスOKA」に委託した。
- (8) 本書作成にあたっては、藤本いづみの協力を得た。
- (9) 遺構番号は発掘調査中において検出した順に通し番号をあり、整理報告の段階において遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構略号として用いたのは、SX（埋甕）、SC（住居跡）、SB（掘立柱建物跡）、SA（塙跡）である。
- (10) 本書に用いた遺物番号は、挿図・図版の遺物番号と一致させている。
- (11) 本書に用いた方位は、磁北である。
- (12) 本報告にかかる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。
- (13) 本書の編集は井澤・藤崎が行い、執筆は第1～2・3章の一部を井澤が、その他を藤崎が担当した。

本文目次

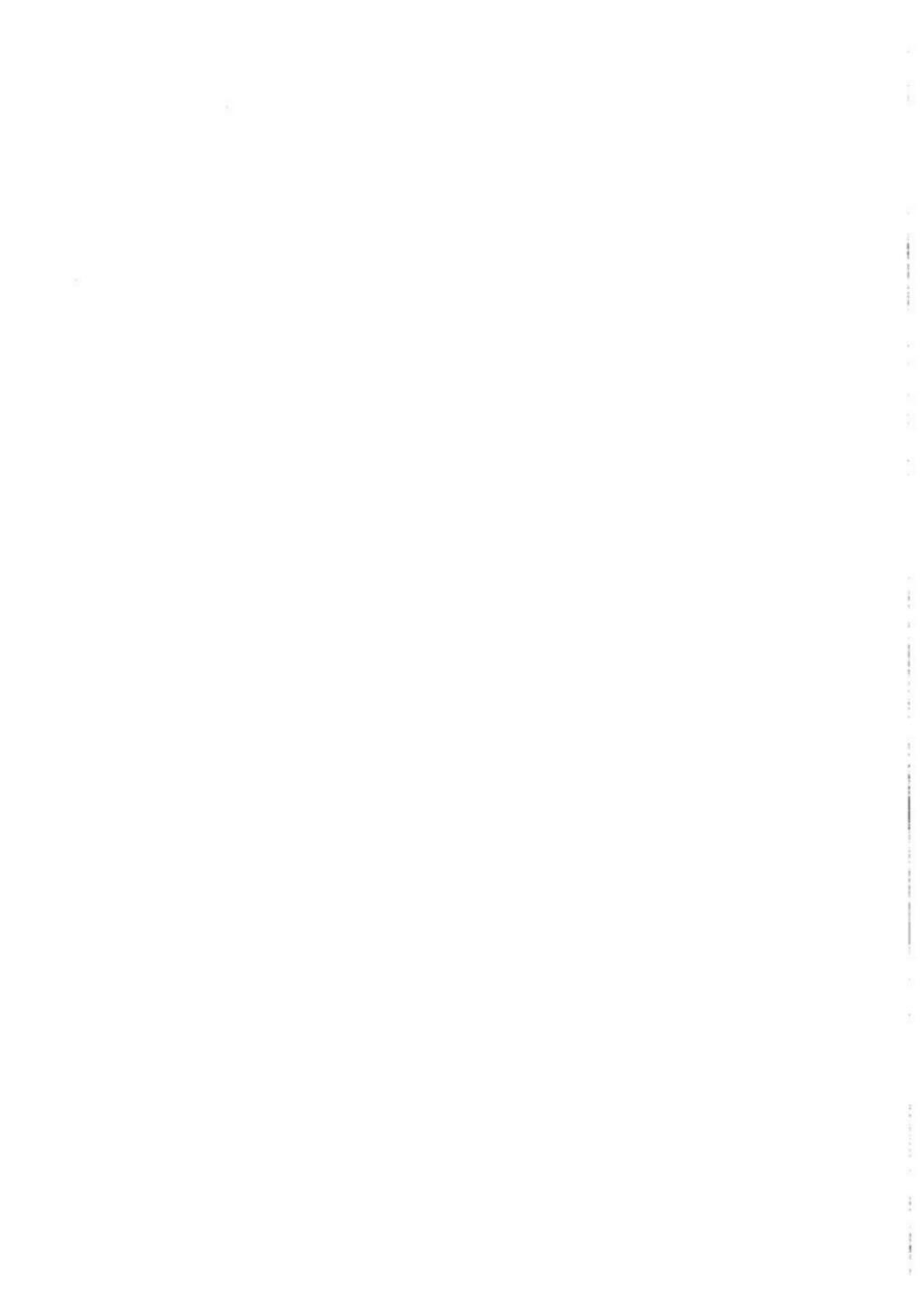
第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査組織	1
(1) 平成11年度の発掘調査組織	1
(2) 平成13年度の資料整理組織	2
第2章 調査経過	6
1. 立地	6
2. 調査の概要と方法	7
(1) 調査概要	7
(2) 遺構概要	7
第3章 調査報告	12
1. 地形と土層	12
(1) 地 形	12
(2) 土 層	12
2. 遺構・遺物説明	18
(1) 墓壙（SX）	18
(2) 墓壙出土遺物	20
(3) 堆穴住居跡（SC）	20
(4) 堆穴住居跡出土遺物	38
(5) 捜立柱建物跡（SB）	43
(6) 捜立柱建物跡出土遺物	54
(7) 横跡（SA）	54
(8) 横跡出土遺物	58
(9) ピット出土遺物	59
(10) トレンチ出土遺物	59
(11) 挖乱層出土遺物	59
(12) 包含層出土遺物	59
(13) 整地層出土遺物	63
(14) 遺構面出土遺物	63
第4章 まとめ	66

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺の遺跡（縮尺1/25,000）	3
Fig. 2	梅林遺跡の周辺遺跡と外環状道路位置図（縮尺1/8,000）	4
Fig. 3	梅林遺跡第1～5次調査位置図（縮尺1/2,000）	8
Fig. 4	梅林遺跡第2・4次調査遺構配置図（縮尺1/500）	11
Fig. 5	梅林遺跡第4次調査地形図（縮尺1/600）	13
Fig. 6	調査区南壁土層・住居跡SC02東壁土層実測図（縮尺1/60）	14
Fig. 7	第4次調査遺構配置図（縮尺1/200）	16
Fig. 8	埋甕配置図（縮尺1/300）	17
Fig. 9	埋甕SX 01・02実測図（縮尺1/10）	17
Fig. 10	馬鹿山土遺物実測図（縮尺1/3）	21
Fig. 11	豎穴住居跡配置図（縮尺1/300）	22
Fig. 12	豎穴住居跡SC 01実測図①（縮尺1/60・1/20）	24
Fig. 13	豎穴住居跡SC 01実測図②（縮尺1/30）	25
Fig. 14	豎穴住居跡SC 02実測図①（縮尺1/60・1/20）	30
Fig. 15	豎穴住居跡SC 02実測図②（縮尺1/60・1/20）	31
Fig. 16	豎穴住居跡SC 01出土遺物実測図（縮尺1/3）	39
Fig. 17	豎穴住居跡SC 01出土石製品実測図（縮尺1/1・1/3）	40
Fig. 18	豎穴住居跡SC 02出土遺物実測図①（縮尺1/3）	41
Fig. 19	豎穴住居跡SC 02出土遺物実測図②（縮尺1/3・1/2・1/1）	42
Fig. 20	掘立柱建物跡配置図（縮尺1/300）	44
Fig. 21	掘立柱建物跡SB 01・02実測図（縮尺1/80）	45
Fig. 22	掘立柱建物跡SB 03～05実測図（縮尺1/80）	49
Fig. 23	掘立柱建物跡SB 01・02柱穴土層実測図（縮尺1/20）	50
Fig. 24	掘立柱建物跡SB 03～05柱穴土層実測図（縮尺1/20）	52
Fig. 25	掘立柱建物跡出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）	55
Fig. 26	樹跡配置図（縮尺1/300）	56
Fig. 27	樹跡SA 02実測図（縮尺1/80）	56
Fig. 28	樹跡出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）	58
Fig. 29	ピット・トレンチ・擾乱横出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）	60
Fig. 30	包含層出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）	61
Fig. 31	整地層出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）	62
Fig. 32	遺構面出土遺物実測図①（縮尺1/3）	64
Fig. 33	遺構面出土遺物実測図②（縮尺1/3・1/1）	65
Fig. 34	梅林遺跡第1～6次調査遺構配置図（縮尺1/800）	67
Fig. 35	明治33年梅林遺跡周辺地形図（縮尺1/30,000）	69
Fig. 36	試掘トレンチ土層図（模式図）	69

表 目 次

Tab. 1	梅林遺跡第4次調查堅穴住居跡一覽表	37
Tab. 2	梅林遺跡第4次調查掘立柱建物跡一覽表	54
Tab. 3	梅林遺跡第4次調查出土遺物一覽表	71
Tab. 4	梅林遺跡第4次調查出土石製品一覽表	77



第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会では、平成3年度より福岡市域内を東西に横断する一般国道202号福岡外環状道路予定地内における埋蔵文化財の試掘調査、及び発掘調査を進めてきたが、福岡市西部地区においては、平成7年度のユニバーシアード大会に合わせて、Ⅳ工区一部区間の野芥～福重間を開通させるため急遽工事着手されることになった。

このため平成4年度からⅣ工区早良区賀茂地区に所在する免遺跡第2次調査を始めとして10カ所の遺跡の発掘調査に着手し、今まで多大な成果をあげている。

その間、福岡市交通局は福岡市の中央区、及び西部地区の交通事情の解消の為に地下鉄3号線建設計画を築港より西区橋本迄延長させることを決定した。この路線計画では城南区の福岡大学構内から橋本迄の路線が、福岡外環状道路予定地（Ⅲ工区）と重複していることが判明した。このため、既に用地買収が終了した箇所から順次遺跡の包蔵状況を確認することとし、試掘調査を平成8・9年度の2カ年に亘って実施した。その結果、野芥・梅林地域において、新たに数カ所の遺跡の存在を確認したため、平成9年度より発掘調査を開始した。

平成11年度事業としての発掘調査対象地は、外環状道路第Ⅲ工区の東端部に位置し、福岡市交通局事業の地下鉄3号線建設予定地域にも相当する。

発掘調査は、福岡国道工事事務所、及び福岡市交通局と福岡市教育委員会の三者による受託契約によって実施することとなった。

2. 発掘調査の組織

(1) 平成11年度の発掘調査組織

調査委託者	建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（現国土交通省） 福岡市交通局
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査責任	文化財部埋蔵文化財課長 柳田紹孝（退職）
発掘担当	埋蔵文化財課主任文化財主事 井澤洋一（現文化財交流センター開設準備担当主査）
庶務担当	埋蔵文化財課第一係 木原順二（現西区役所市民課主査）
調査員	古田扶希子、田中昭子
調査協力者	上野道郎、吉鹿裕隆、井手上貢、柴田宏徳、西原雅美、水井ゆり子、折口洋子、大穂栄子、保野志津代、青柳美智子、土生喜代子、庄野崎ヒデ子、箱田香代子、梅野真澄、辻ミチ子、広瀬美知子、古藤あけみ、堀タケ子、西口キミ子、服部由美、橘崎直子、藤崎真歩

(2) 平成13年度の資料整理組織

整理報告委託者 国土交通省九州地方建設局福岡国道工事事務所
 福岡市交通局

整理報告主体者 福岡市教育委員会

整理報告責任者 文化財部埋蔵文化財課長 山崎純男

整理報告担当 文化財整備課整備係長 井澤洋一（現文化財交流センター開設準備担当主査）
 底務担当 文化財整備課管理係 宮川英彦（現内区役所保険年金課）

調査員 田中昭子、藤崎真歩

資料整理 江口しづの、堀タケ子、辻ミチ子

遺跡調査番号	9963		遺跡略号	UBY-4
地番	城南区梅林4丁目451-10・11		分布地図番号	七隈74
開発面積	910.44m ²	調査対象面積	910.44m ²	調査面積 760m ²
調査期間	平成11年7月24日～10月30日			



1. 梅林遺跡 2. 十咫古墳D群 3. 梅林古墳 4. 雨林八幡宮古墳 5. 五ヶ村池古墳 6. 下院B古墳群
 7. 水舟遺跡 8. 別府遺跡 9. 西新町遺跡 10. 藤崎遺跡 11. 須倉原遺跡 12. 七栗古墳群

Fig. 1 周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

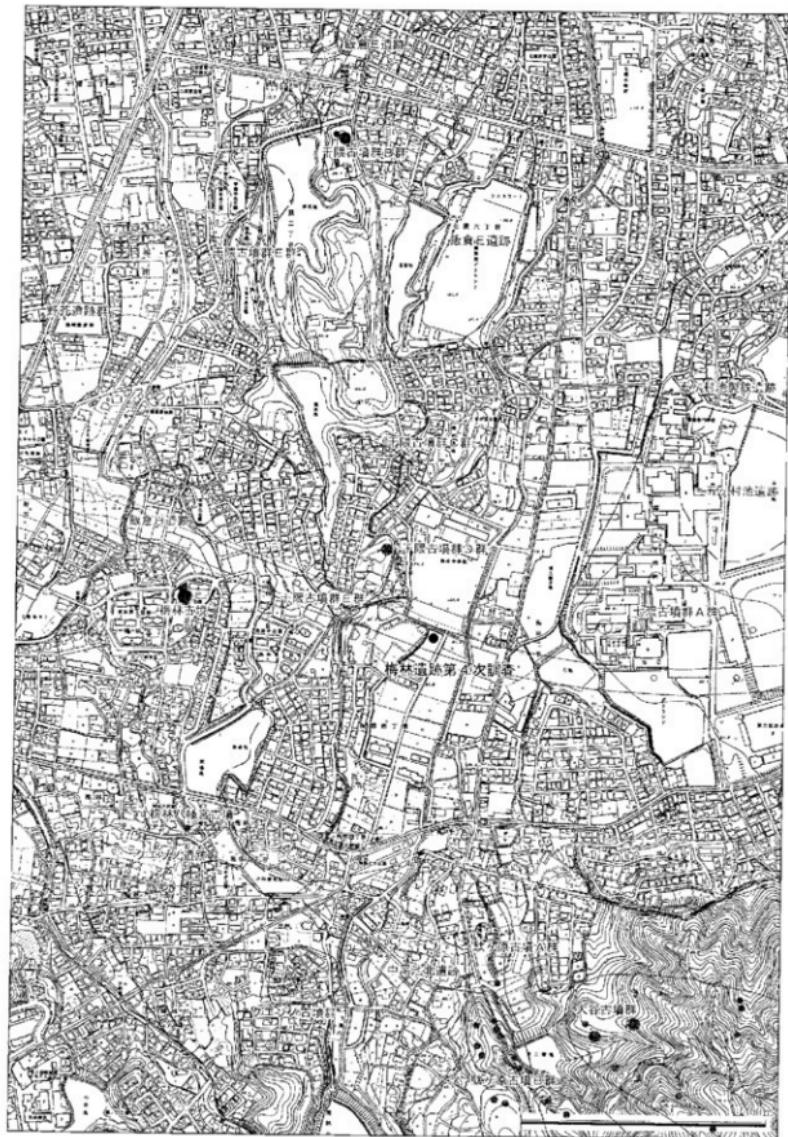
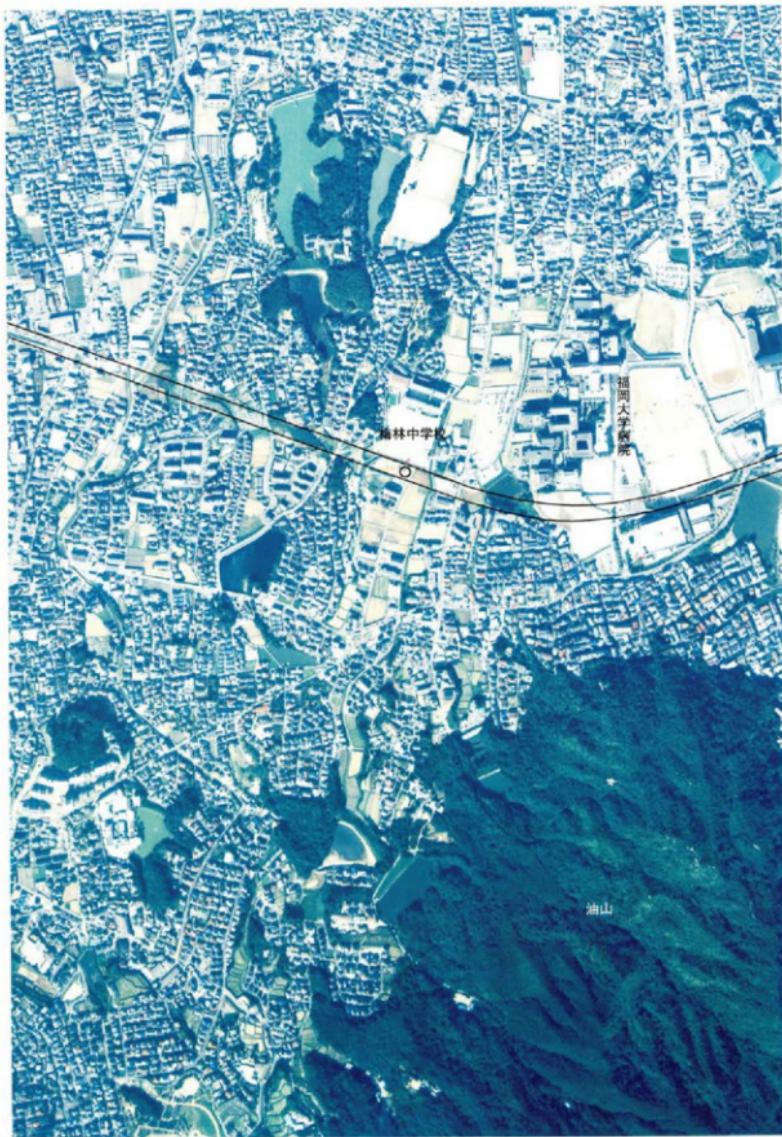


Fig. 2 梅林遺跡の周辺遺跡と外環状道路位置図 (縮尺1/8,000)

□ 図場空堀区域



油山・梅林地域の航空写真

※写真撮影については国土地理院の許可を得た。
○印は調査地点

第2章 調査経過

1. 立地

早良平野を南北に貫流する室見川は、背振山系を源流として山麓の内野・脇山地区に広大な段丘を形成し、更に全長約15.5kmに亘る流域には肥沃な沖積地を形成している。古代には背振山系一帯には密教が隆盛を極めたが、この室見川の東岸に位置する油山も同様であった。特に油山西麓に存在した天福寺は対外交戦にも関わりを持ち、背振山系密教の中心であった東門寺との間に争論を繰り返す程の勢いをもっていた。

この油山からは、更に博多湾に向かって幾つもの舌状丘陵が派生している。この丘陵には数多くの遺跡が存在するが、特に干隈から飯倉に至る全長約2.5kmを測る丘陵上には、銅剣が出土した飯倉遺跡や、銅鏡の鋳型が出土した飯倉D遺跡、更に南側の尾根上には前方後円墳の十隈古墳が存在する。また、福岡大学病院が立地する標高30~40mの丘陵には、縄文時代の遺跡である五ヶ池遺跡や古墳時代と考えられる製鉄遺跡が存在するが、最も顕著な遺跡としては、古墳群の分布である。この丘陵にもかつては七隈古墳群が分布していたが、現在は福岡大学の校庭拡張や周辺の開発によってその数は減じている。この丘陵からは、更に東方向や西方向に舌状台地を複雑に分岐しており、これらの台地の先端部には集落遺跡が散在していることが、発掘調査などにより推定することができる。

当該池周辺の遺跡については、従来より特に梅林地域に於いては主に七隈古墳群を中心とした後期古墳群の分布地域として知られており、集落遺跡の状況については余りわかつてはいない地域であった。近年、住宅の開発に伴い、その実態が明らかになりつつある。

発掘調査例としては、平成元年~3年に梅林三丁目地域において公園建設に伴い、赤生~古墳時代の集落遺跡である飯倉F遺跡の調査を行い、又、飯倉C遺跡では、古代の水窓跡なども発見している。梅林遺跡から西方向に約600mの地点には1989年に発掘調査を行った5世紀後半から6世紀中頃の時期で、全長約30mを測る前方後円墳の梅林古墳が存在している。この古墳の副葬品の中には外來系の上器が含まれていた。さらに当遺跡から南方向に約56mに位置するクエゾノ古墳群は、1992年の発掘調査の結果、5世紀代の古墳であることが判明したが、副葬品には製鉄に関わる工具が出土しており、渡来系の製鉄集団の存在を何を示していることから梅林遺跡の古墳時代遺構との密接な繋がりを示すものと考えられる。

当該池の地形は、おおむね南北方向の飯倉丘陵の尾根から北東方向に小さく突き出した台地上に立地し、七隈川の開削によって造り出された狭長な平野に立地している。台地縁辺の水田化は早くから行われていたが、昭和55年に竣工した福岡市営圃場整備事業に際しての水田区画調整のために台地が大きく削平を受けており旧地形を留めていない。

調査地点の東側には、三面をコンクリートで固められた七隈川が細々とその流れを留めているが、七隈川を中心とした周辺の谷地形は、両岸に標高約30mの丘陵が迫っていることから最大幅が80~100m程の狭小な平野を形成しているにすぎない。

また、現在は圃場整備によって平坦地形が形成されているが、かつては全体が傾斜地形であったと考えられる。この緩傾斜地面が現在も水田として利用され続けられている。

梅林地区的発掘調査は、平成14年度現在6カ所である。平成9年度に梅林遺跡第1次調査では、古墳時代の居館跡や平安時代の水印跡を発見した。平成10年度の第2次調査においては、オンドル構造をもつ堅穴住居跡の集落を発見したが、この集落は第1次調査で発見した古墳時代の居館跡の時期に

も近く、直接的に関わる遺跡として注目される。平成11年度の第3次調査では、第1・2次調査に関わる居館跡の一部の他、奈良～江戸時代の水田跡などを検出した。今回の発掘調査では、地形的に第2次調査地点と占地を同じくすることから関連する古墳時代の竪穴住居跡の他、古墳時代～奈良時代の掘立柱建物跡や柵跡を発見した。

2. 調査の概要と方法

(1) 調査概要

調査対象地の現況は段々畑の水田で、一帯は七瀬川西岸の段丘を利用した水田地帯であった。水田面の標高は、最も低い七瀬川西岸部では20.8m、丘陵上部の第2次調査地点では24.7mを測る。当該地と東側市道路面との比高差は無いが、道路東側の水田との比高差は1.6mを測る。

調査対象地内は、平成8年度の試掘調査において地権者の了解を得て北側の梅林中学校寄りにトレーニングを設定した。調査ではFig.36の模式図に示したとおり90cm深さから粗砂混入した茶褐色土層、及び深さ140cmではマンガンを含んだ黄褐色粗砂層を検出した。よってトレーニング内では遺構を発見できなかったため「遺跡の包藏無し」と判断していた。しかし、その後第2次調査の結果により当該地においても遺構存在の可能性が高まったため福岡市土地開発公社による用地買収が終了した時点において再度試掘調査を実施した結果、住居跡などを発見したため発掘調査を実施するに至った。

しかしながら工事の進捗に伴い、工事用道路を当該地に設ける必要性が緊急的に浮上したため調査区北側の第一次の試掘調査（平成8年度）を行った部分約240.54m²については、埋蔵文化財調整事務局として「遺跡が存在しない部分」と判断し、工事用道路の建設工事着手を承諾し、発掘調査対象地から除外した。

表土・残土処理については、場外への搬出移動が難しいことから調査区内において反転処理を余儀なくされた。

表上の除去は、試掘調査の成果に基づき、削平の著しい西側半分は、地山面まで一気に掘り下げ、東側半分については、黒色粘質土の遺物包含層が存在するためこの層の上面にてとどめた。包含層の分布状態は、攪乱や園場修復等の削平があるため全面に遺存しておらず調査区中央部のFig.7に示した範囲であるが、この包含層は、奈良時代と考えられる掘立柱建物跡周辺にのみ分布していることから整地層と考えられる。高台付近等の須恵器や土師器が多く出土している。

測量基準点は公共座標を用いたが、調査区内のメッシュ杭は第2次調査の基準杭に併せて設置した。メッシュ杭は、面割付けの都合上、南北10m、東西6mの大体の方眼を組み、内部は2mメッシュとした。座標はFig.5に示した通りである。

(2) 遺構概要

- | | |
|----|-----------------------------|
| 遺構 | 1. 繩文時代 堆窓 2基 |
| | 2. 古墳時代 竪穴住居跡 3軒 |
| | 3. 古墳時代～奈良時代 掘立柱建物跡 5棟 |
| | 4. 古墳時代～奈良時代 柵跡1条、溝1条、不明遺構1 |

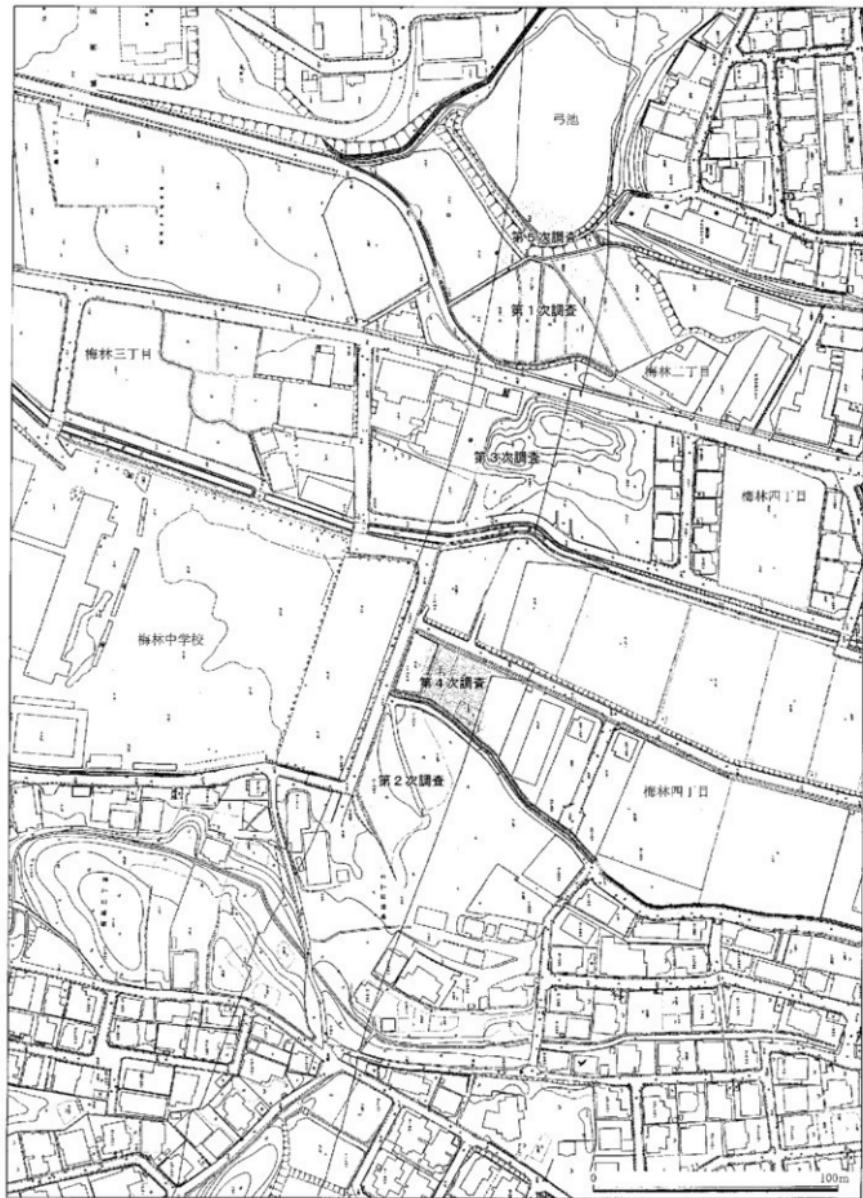


Fig. 3 梅林遺跡第1～5次調査位置図（縮尺1/2,000）



梅林遺跡第1～5次調査全景



梅林遺跡第2・4次調査全景

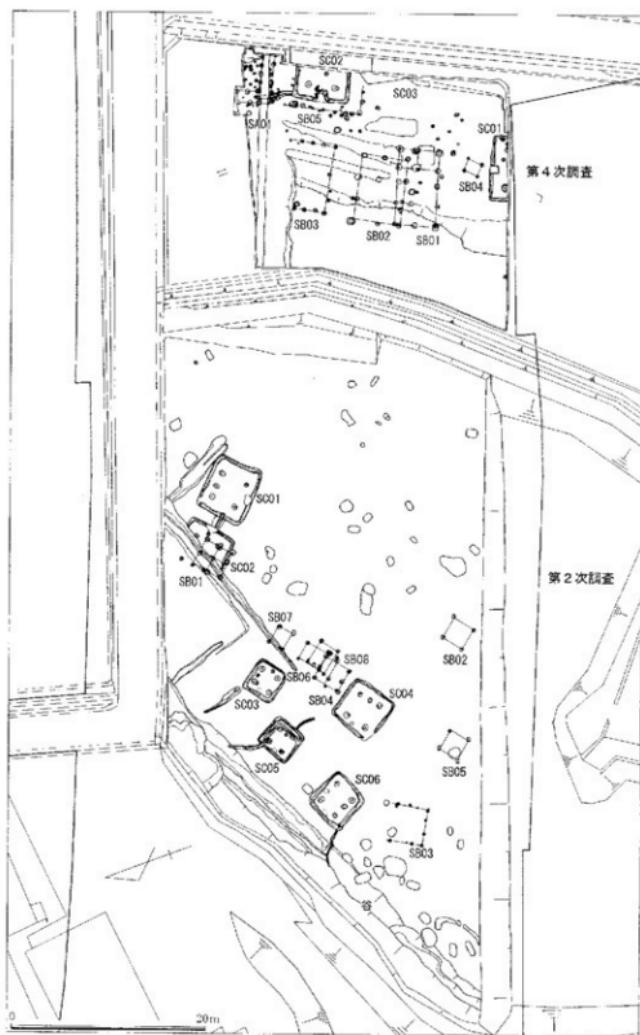


Fig. 4 梅林遺跡第2・4次調査遺構配置図（縮尺1/500）

第3章 調査報告

1. 地形と土層

(1) 地形

発掘調査前の地目は水田であるが、当該地は水掛かりの関係から七隈川に向かって段々畝を形成している。七隈川西岸部との比高差は1.6mを測る。

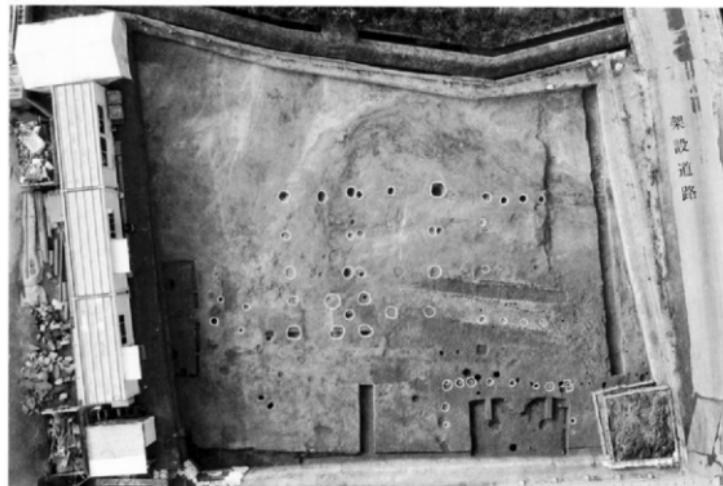
既述した様に、当該地は標高約32mを測る飯倉丘陵尾根より北東方向へ突き出した舌状台地の先端部に立地する。この舌状台地の元来の標高は、昭和55年に福岡市による3ha規模の圃場整備が行われているため不明であるが、尾根との比高差が約9.5~10.2mを測ることから大幅な地山削平による造成が行われたことが想像できる。削平は圃場整備以外にも古墳時代、古代にも断続的に行われた可能性が大きい。

また当該調査範囲は、第2次調査地点と東側市道に挟まれた幅約26mの範囲である。旧耕作土の標高は、約22.0mである。遺構面の標高は、西側では約22.0m、東側では約21.50mを測る。

区画整理以前の水田面は、地山面及び第4層の下面において2カ所の段が認められることから上段は幅16m程度、中間の段は幅2m程度の区画で、下段は急激に傾斜している。この急激な傾斜部分上部に埋立によって市道が建設されている。

(2) 土層

調査区南壁面の土層 (Fig. 6) 観察では、上面から第1層が現代の客土で、旧耕作土の上面に25~30cmの盛土が行われている。第2層が旧耕作土(現代)、第3層は床土、第4層は淡灰褐色粘質土と、暗灰色粘質土及び、茶褐色粘質土の混合土となっている。第4層は、圃場整備時の客土層で、深さは西側で最大75cmを測る。田面基盤の切土・盛土工事によって地形に沿った不整形の段々畝から



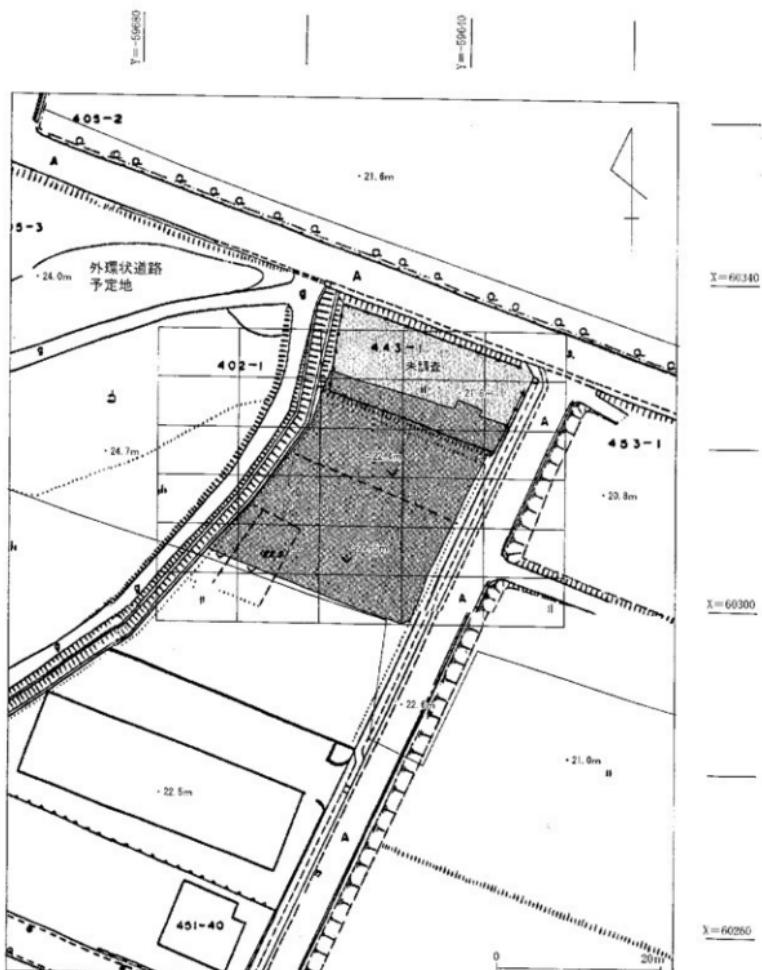


Fig. 5 梅林遺跡第4次調査地形図（縮尺1/600）

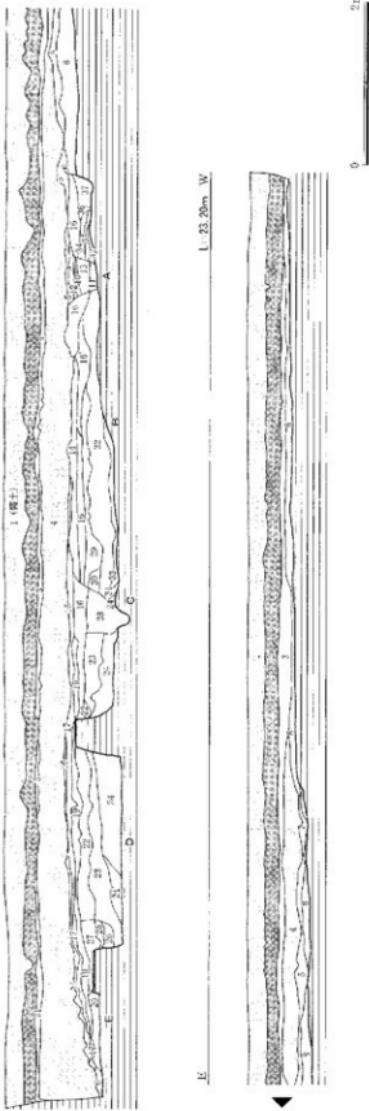
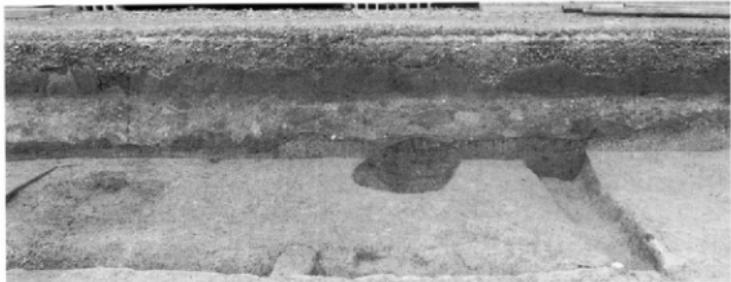


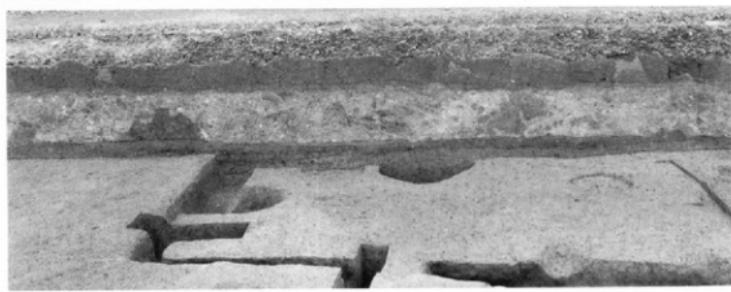
Fig. 6 調査区南壁土層・住居跡SC02東壁土層実測図(縮尺1/60)

- SC02東壁土層名称
1. 深褐色砂質土
 2. 黄褐色砂質土
 3. 黄褐色砂質土
 4. 黄褐色砂質土
 5. 黄褐色砂質土
 6. 黄褐色砂質土
 7. 黄褐色砂質土
 8. 黄褐色砂質土
 9. 黄褐色砂質土
 10. 黄褐色砂質土
 11. 黄褐色砂質土
 12. 黄褐色砂質土
 13. 黄褐色砂質土
 14. 黄褐色砂質土
 15. 黄褐色砂質土
 16. 黄褐色砂質土
 17. 黄褐色砂質土
 18. 黄褐色砂質土
 19. 黄褐色砂質土
 20. 黄褐色砂質土
 21. 黄褐色砂質土
 22. 黄褐色砂質土
 23. 黄褐色砂質土
 24. 黄褐色砂質土
 25. 黄褐色砂質土
 26. 黄褐色砂質土
 27. 黄褐色砂質土
 28. 黄褐色砂質土
 29. 黄褐色砂質土
 30. 黄褐色砂質土
 31. 黄褐色砂質土
 32. 黄褐色砂質土
 33. 黄褐色砂質土
 34. 黄褐色砂質土
 35. 黄褐色砂質土
 36. 黄褐色砂質土
 37. 黄褐色砂質土
 38. 灰褐色砂質土
 39. 灰褐色砂質土
 40. 7.2年や灰土、
- 東壁土層
- N
- L=22.80m S
- E
- 南壁土層
- E
- L=22.80m W
1. 壁一
2. 壁二
3. 壁三
4. 壁四
5. 壁五
6. 壁六
7. 壁七
8. 壁八
9. 壁九
10. 壁十
11. 壁十一
12. 壁十二
13. 壁十三
14. 壁十四
15. 壁十五
16. 壁十六
17. 壁十七
18. 壁十八
19. 壁十九
20. 壁二十
21. 壁二十一
22. 壁二十二
23. 壁二十三
24. 壁二十四
25. 壁二十五
26. 壁二十六
27. 壁二十七
28. 壁二十八
29. 壁二十九
30. 壁三十
31. 壁三十一
32. 壁三十二
33. 壁三十三
34. 壁三十四
35. 壁三十五
36. 壁三十六
37. 壁三十七
38. 壁三十八
39. 壁三十九
40. 7.2年や灰土、

調査区南壁土層の状態①（北から）



調査区南壁土層の状態②（北から）



調査区南壁土層の状態③（北から）



住居跡SC02東壁土層の状態（北西から）



整形な区画図面へと地形変更が成されているが、この層は圃場整備の基盤を整えるための整地層と考えられる。第5層は圃場整備工事に伴う擾乱土、第7・8層は地山八女粘土層の汚染層である。住居跡SC01上面に存在する第15・16・17層は旧表土と考えられる。

土層図に現れた遺構の内、Bは住居跡SC01、Cは溝であるが、A・D・Eの遺構については表上除去当初に上層観察のため、一気に掘り下げたため面的に捉えることができなかった。Dについては、南側に隣接した第6次調査によって竪穴住居跡であることが確認されている。

調査区遺構面は、西側は削平によって地山の八女粘土層及びその間層を形成する砂質層が表出しているが、この八女ローム層は調査区西端から約10m付近で急激に落ち込むため調査区東側は、ローム層風化土が二次堆積した茶褐色粘質土が遺構面になっている。調査区東側の遺構はこの茶褐色粘質土面から掘り込まれていた。黒色粘質土の包含層は、掘立柱建物跡SB01・02の存在する段落ち部分に分布していた。

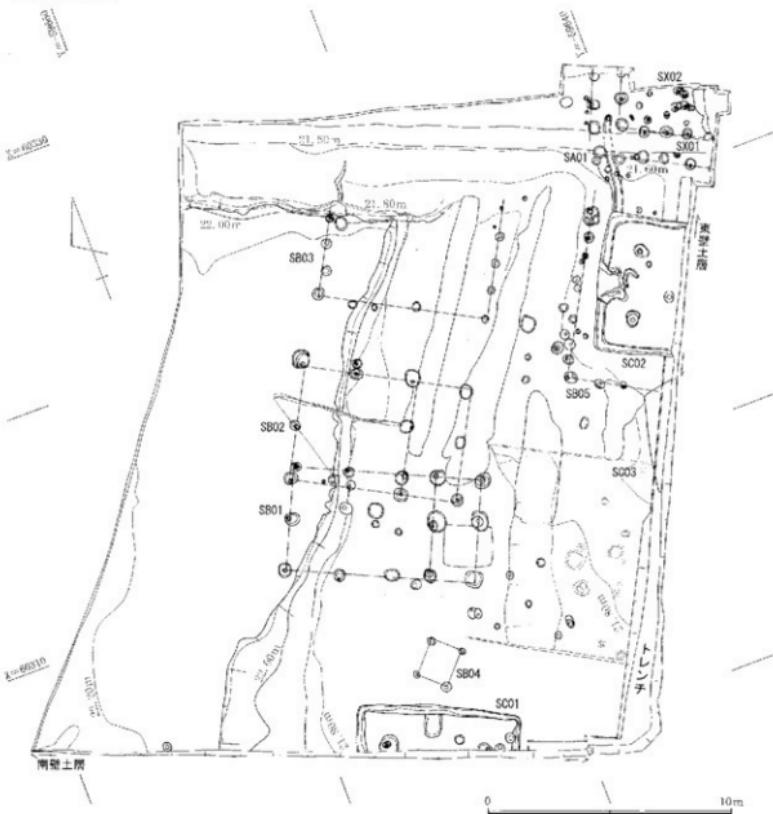


Fig. 7 第4次調査遺構配置図 (縮尺1/200)

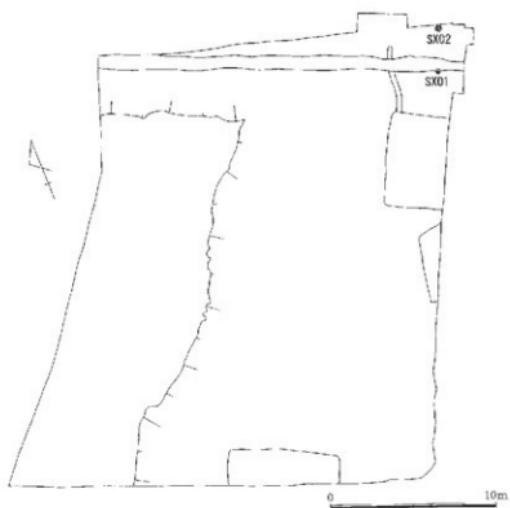


Fig. 8 埋設配置図（縮尺1/300）

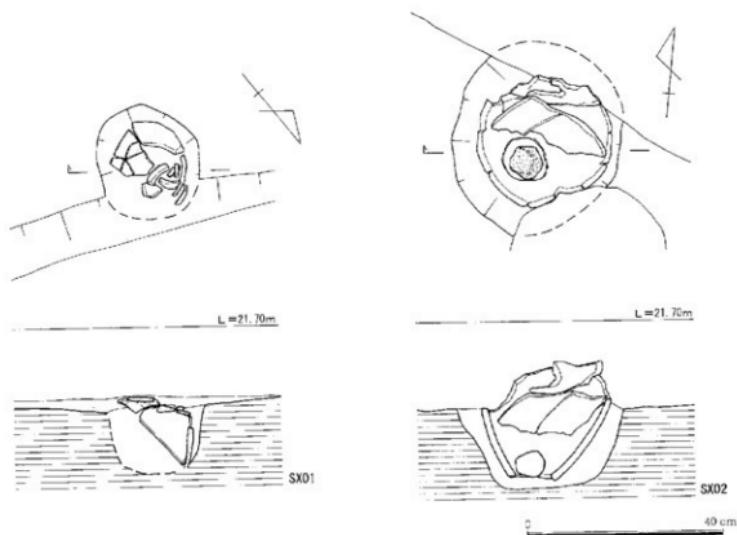


Fig. 9 埋設 SX01・02実測図 (1/10)

2. 遺構・遺物説明

(1) 埋甕 (SX)

縄文時代後期と考えられる埋甕を2基検出した。いずれも調査区の北東側に位置するが、調査区境や現代の暗渠排水溝によって切られるため、全体形は不明である。

SX01(Fig. 9) 調査区の北東側に位置する。調査区を東西に走る現代の暗渠排水溝によって北側を切られるため全体形は不明である。かつ大部分を削平されて、遺存状態も悪く原型を留めていない。墓壙は不整円形を呈し、断面は摺鉢状を呈する。墓壙の最大径は21 cm、深さ15 cmを測る。墓壙内部には縄文時代後期の鉢の口縁部片と底部片が遺存している。



埋甕SX02（南から）



埋甕SX02底部の状態（南西から）



埋甕SX02断面の状態（南から）



SX02 (Fig. 9) 調査区の北東隅境界地に位置する。削平のため遺存状態は悪い。全体形は不明であるが、掘方平面形は不整円形を、断面形は逆梯形状を呈する。最大径89 cm、深さ17 cmを測る。内部には、下甕をほぼ直立した形で埋めている。

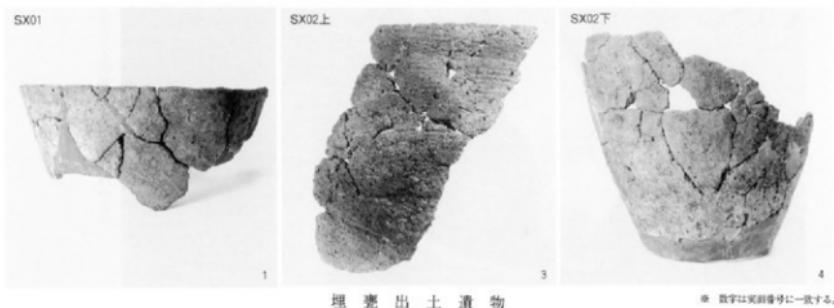
下甕の鉢底は打ち抜かれているが、内底には底を詰めた状態で拳大の1石が存在する。現存高は22 cm、最大径は27 cmを測る。上甕片は崩落した状態で下甕内に存在する。この上下の甕には、いずれも縄文時代後期の深鉢を用いている。

(2) 埋甕出土遺物

埋甕出土遺物 (Fig.10) 1はSX01、2～4はSX02から出土した。

1は鉢口縁部と底部片で、復原口径18.8 cm、底径7.0 cmを測る。内外面不整方向の指ナデ調整で、外面一部に条痕が残る。3は上甕の深鉢で、口縁～胴部片である。外面は条痕が残り、口縁部内面はヨコナナデ調整、胴部内面はナデ調整である。4は下甕の深鉢で、胴部片である。口縁部と底部を欠く。外面はタテ方向の条痕が、内面はヨコナナデ調整、一部に指頭圧痕が残る。

2は花崗岩の自然石である。風化が著しい。SX02の深鉢内底で検出した。



(3) 壇穴住居跡 (SC)

壇穴住居跡は全部で3軒検出した。調査区の南端に1軒、北東側に2軒である。いずれも境界地に位置するため全体形は不明であるが、平面形は略長方形と考えられる。壇穴住居跡 SC01・02はいずれも6世紀代のもので、SC01は特に著しい削平を受けている。住居跡 SC03は調査期間の関係で発掘調査ができず、住居構造は不明である。

住居跡 SC01・02は、周壁沿いを全周すると思われる壁溝（煙道）を設けている。本来これは粘土によってトンネル状の構造を形成し、カマドからの煙を住居内に循環させるもので、いわゆるオンドル構造を有していたものと考えられる。

オンドル構造と考えられる住居跡は、当該地の西側に隣接する梅林遺跡第2次調査で検出しており、今回の住居跡と同様な構造形態である。壇穴住居跡造当初のオンドル機能の主たるカマドを廃止し、通常見られるカマドを新たに造りなおして使用した状況が確認された。またオンドル住居跡は県内外に多数発見されているが、当遺跡のように住居内全体に巡る煙道を検出した例は少ない。

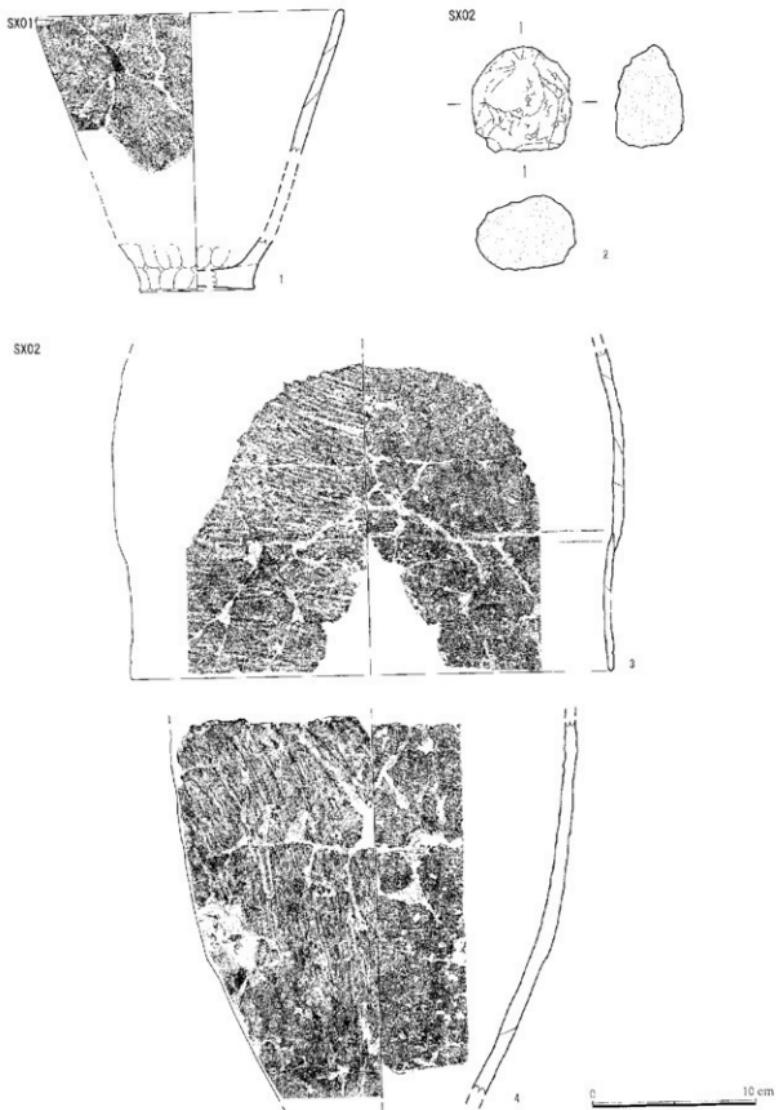


Fig.10 烧堊出土遺物実測図 (縮尺1/3)



Fig.11 壓穴住居跡配置図（縮尺1/300）



壓穴住居跡・掘立柱建物跡全景（西から）

SC01(Fig.11・12・13) 南端の調査区境に位置する。調査区内で検出した約1/3程度の部分を発掘調査した。上面は著しい削平を受けており、壁・カマドの遺存状態は悪い。平面形は、略長方形と考えられる。長軸は、略南北方向で、現存長は南北長約1.9m、東西長6.7m、壁の残存高約20 cm を測る。主柱はP1・P2の2本のみ検出しており、柱穴長径は現存長35~67 cm、短径55~70 cm、深さ42~85 cm を測る。柱根径は17 cm を測る。

カマドは北壁中央に造りつけているが、遺存状態は悪い。断面観察では、炉床は二重になっており、2回に亘って造り替えられている。上面のカマドは、略南北の長さ96 cm、幅78 cm を測る。カマド内には、構築材として用いたと思われる土器片が存在した。カマド内に支脚等は存在していない。袖部と思われる粘土が一部残存する。炉床と考えられる焼土面は、床面より約6 cm 程高い位置にあり、固く焼けしまっていた。焼土面の範囲は、南北長約70 cm、幅は65 cm を測る。焼土の南側には更に炭化物層が広がっている。

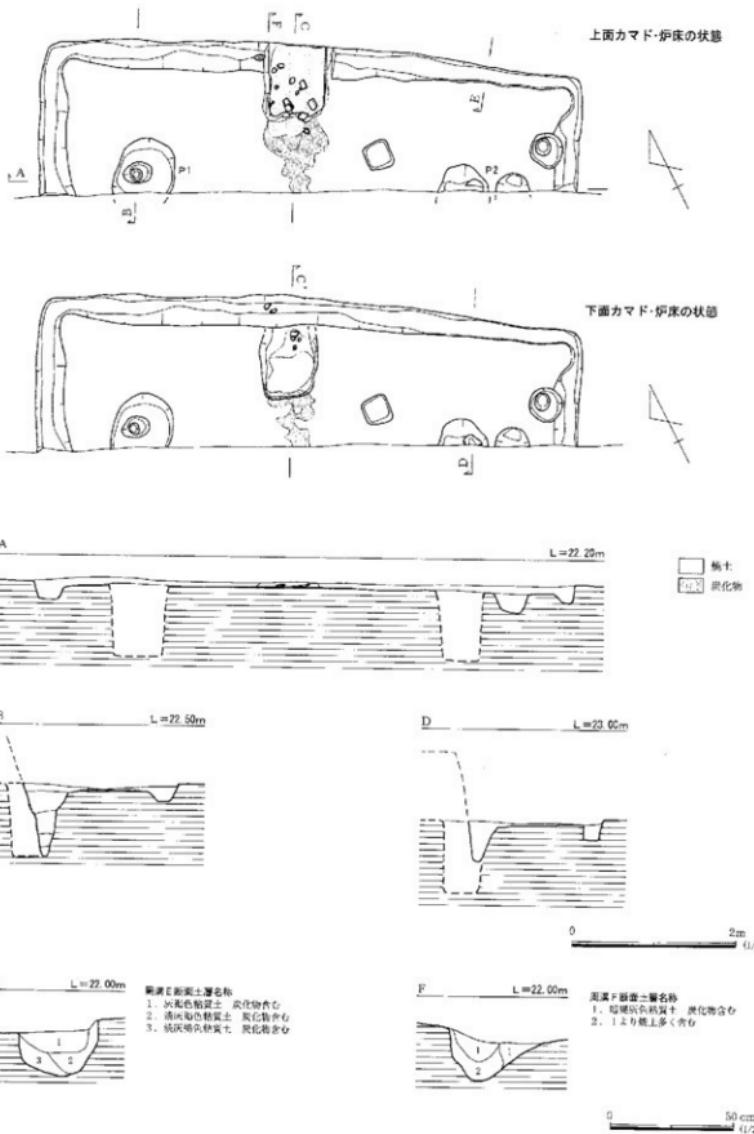
下層カマドは、炉床のみを検出した。炉床は、長さ87 cm、最大幅71 cm、深さ2.5 cm の掘り込みを持っており、焼土面は南北方向に広がって北側は周溝に接している。第2次調査検出のオンドル構造と考えられる堅穴住居跡のカマドの状態に相似していることからオンドル構造の住居跡と推測できる。

周溝は幅18~37 cm、深さは12~20 cm を測る。住居跡壁際に沿って、全周するものと思われる。覆土に焼土・炭化物を含む。特に北西側、北東側コーナー部分が最も狭く、北西側コーナーは特に浅い。オンドル構造の住居跡であれば、この北西側、北東側コーナーに排煙溝の存在を想定できる。

遺物は、カマド内から土師器甕、床面から土師器甕・鉢、須恵器坏身・坏蓋、周溝から土師器甕、須恵器坏身・坏蓋、石製品などが出土している。



堅穴住居跡 SC01 及び南壁土層の状態（北西から）



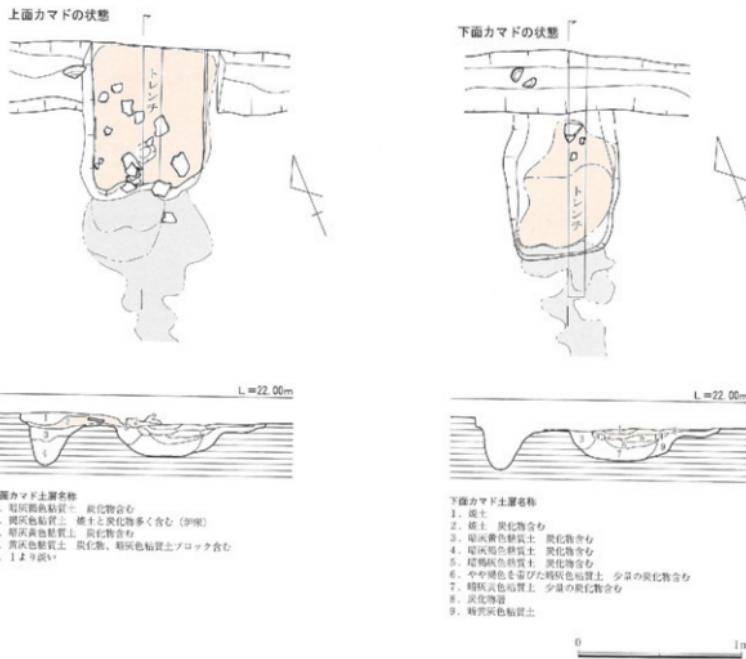
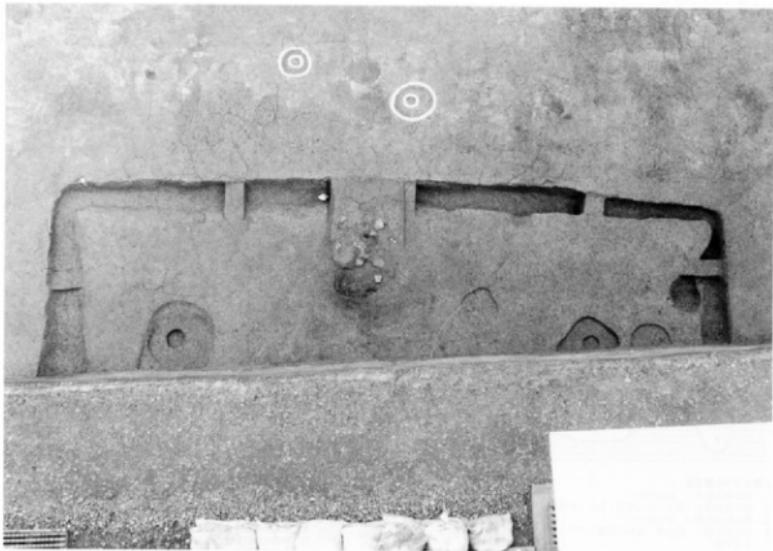
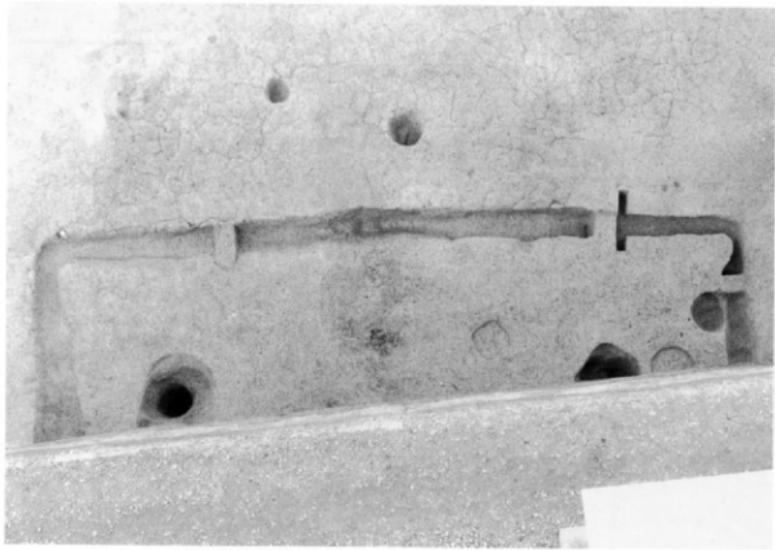


Fig.13 壺穴住居跡 SC01実測図② (縮尺1/30)





堅穴住居跡 SC01 及び上面カマド・炉床の状態（南から）



堅穴住居跡 SC01 及び下面カマド・炉床の状態（南から）



堅穴住居跡SC 01上面カマド炉床（南から）



堅穴住居跡SC 01下面カマド炉床（南から）



堅穴住居跡SC 01カマド・焼落土層状態（西から）

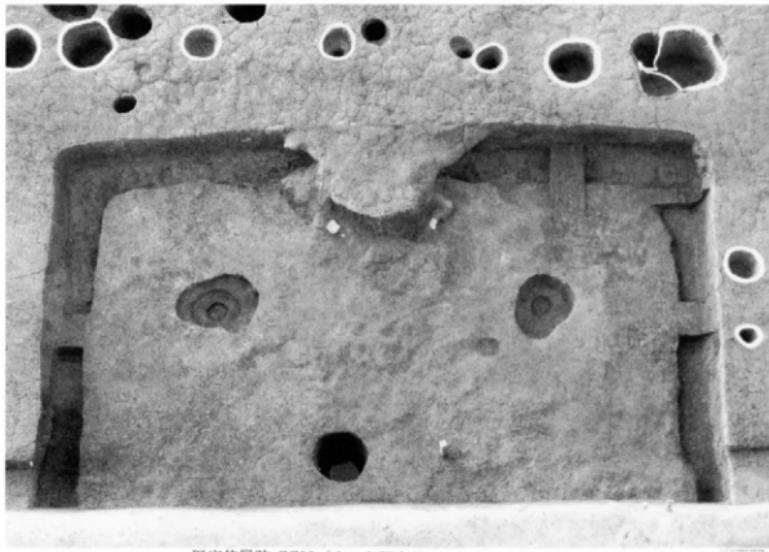
SC02(Fig.10・13・14) 調査区の北東隅に位置する。境界地にあるため住居跡全形は不明で、約1/2部分を発掘調査対象とした。上面は削平を受けている。オンドル構造の住居跡と考えられる。

平面形は、隅丸長方形と考えられる。現存の南北長は約5.1m、東西長は約3.5m以上、壁の残存高は約30cmを測る。主柱はP1・P2の2本のみ検出しており、柱穴長径は67~70cm、短径は47~52cm、深さは74~77cmを測る。

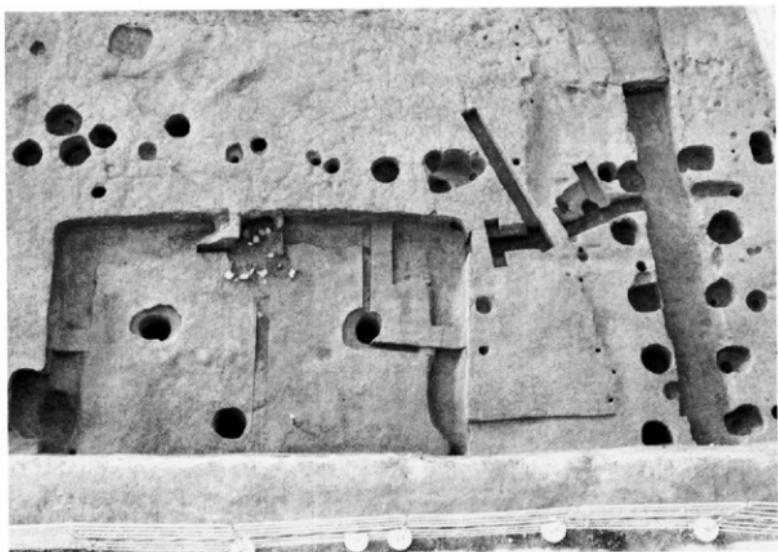
壁に沿った周溝は全周するものと思われる。カマドは西壁中央に造りつけており、遺存状態は比較的良い。カマド部分の中央に設定したトレンチ調査の結果から、カマド炉床が二重に存在することが判明した。カマド壁体は褐色粘土を用いて逆ハの字型に設けている。

上面カマドの焼土面（炉床）は、床面より3cm程上面で検出した。平面形が、不整椭円形を呈した炉床は、周溝から65cm離れて存在する。炉床焼土面は、長さ約80cm、幅約70cmを測る。焼土の東側には炭化物層が広がっており、焚き口と考えられる。カマド中央の周溝と炉床が接している部分には、長さ32cmの方柱状砂岩が支脚として据えられており、床からの高さは9cmを測る。Fig.14のカマド断面土層をみるとカマドの奥壁が住居の外に突出しており、この部分が排煙のための煙出し構造と考えられる。また、この上面カマド炉床は、周溝上に乗っていることから上面のカマドは周溝を利用しないことが判明した。

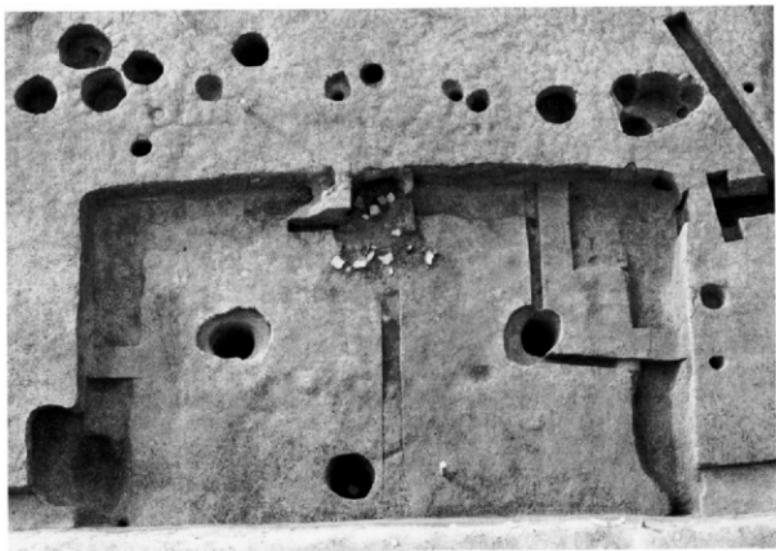
下面カマドの焼土面（炉床）は周溝に接しており、最大径40cmを測る。このカマド炉床は周溝と切り合いがみられず、周溝と同時に設置されたものと考えられる。焚口と考えられる部分の東側には炭化物層が広がっている。また、カマドの南側には2条の焼土面があり、若干くほんでいることから煙道の可能性もある。



壁穴住居跡 SC02（カマド調査前）の状態（東から）



堅穴住居跡 SC02 及び煙道の状態 (東から)



堅穴住居跡 SC02 完掘後の状態 (東から)

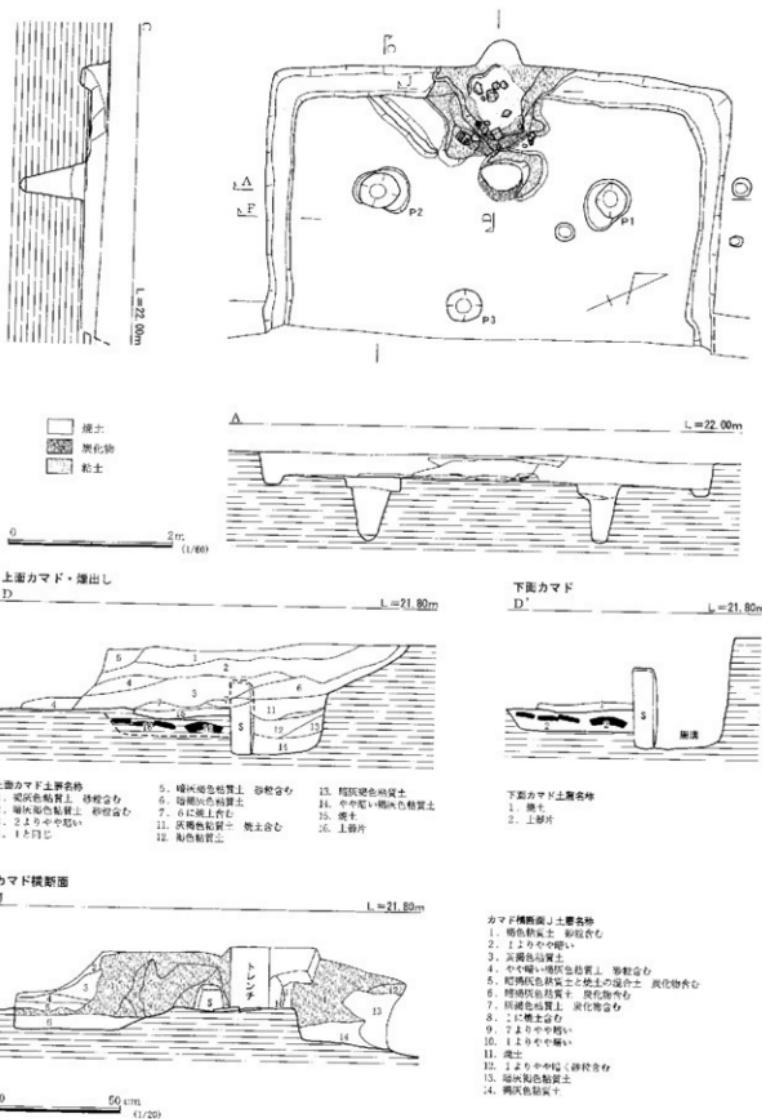


Fig.14 坪穴住居跡 SC02 実測図① (縮尺1/60・1/20)

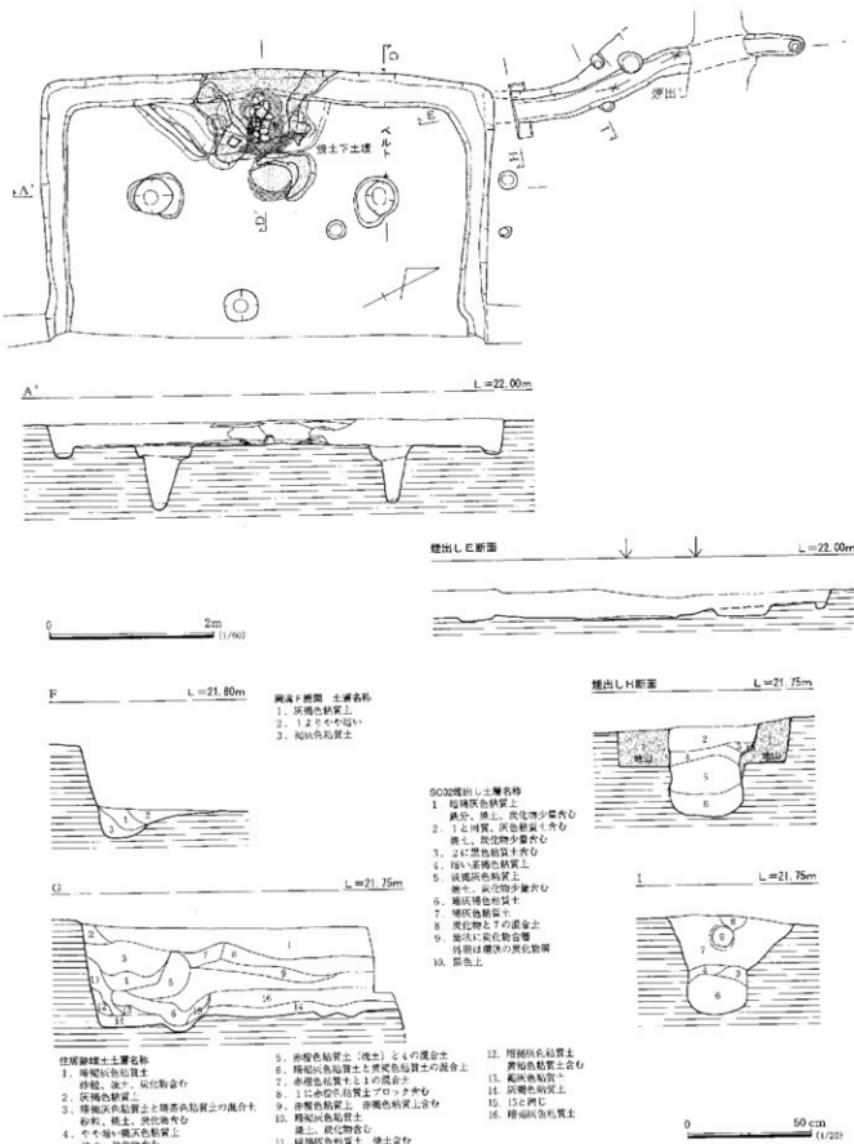


Fig.15 壁穴居跡 SC02 実測図② (縮尺1/60・1/20)



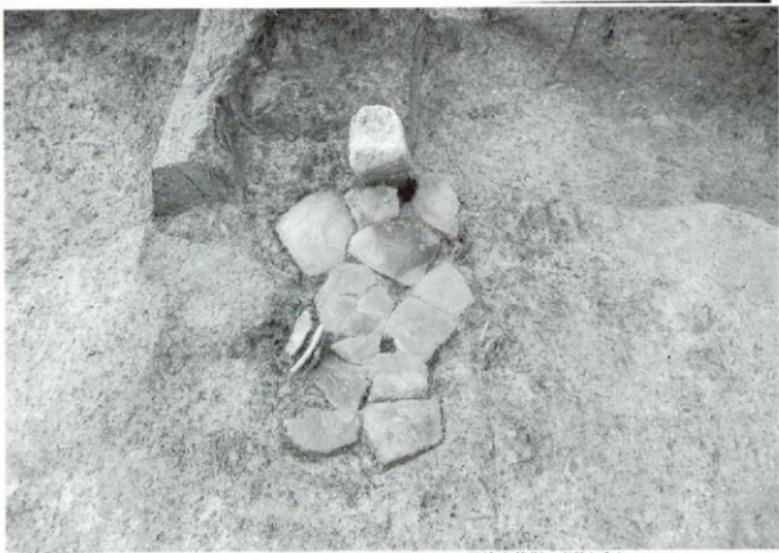
堅穴住居跡 SC02 カマドの状態（北東から）



堅穴住居跡 SC02 カマド断ち割り状況（北東から）



豊穴住居跡 SC02 カマド横断面の状態（東から）



豊穴住居跡 SC02 下面カマド炉床下の土器検出状況（東から）



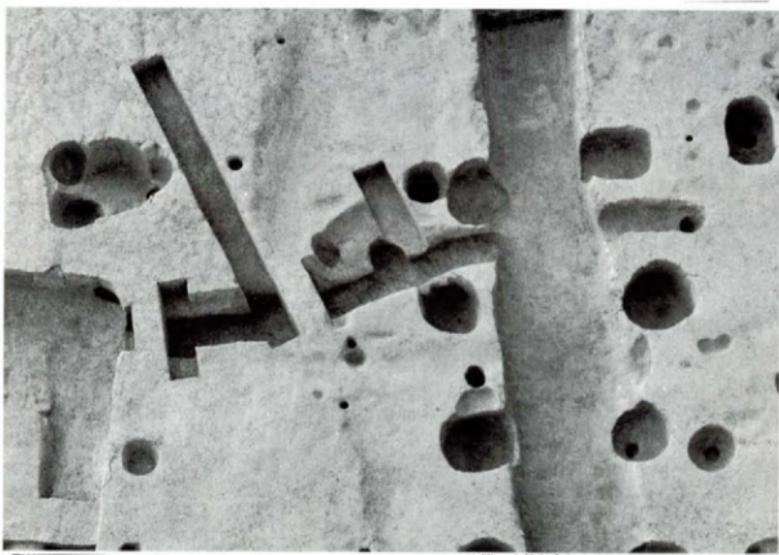
堅穴住居跡 SC02 上面カマド煙出し部分断面の状態（北から）



堅穴住居跡 SC02 下面カマド炉床及び、埴溝土層の状態（北から）



堅穴住居跡 SC02 カマド下位部分、上面カマド煙出しの完掘状態（東から）



堅穴住居跡 SC02 西北隅煙出しの状態（東から）

竪穴住居跡SC02煙出し排煙口（南東から）



竪穴住居跡SC02煙出し土層状態①（北から）



竪穴住居跡SC02煙出し土層状態②（北から）



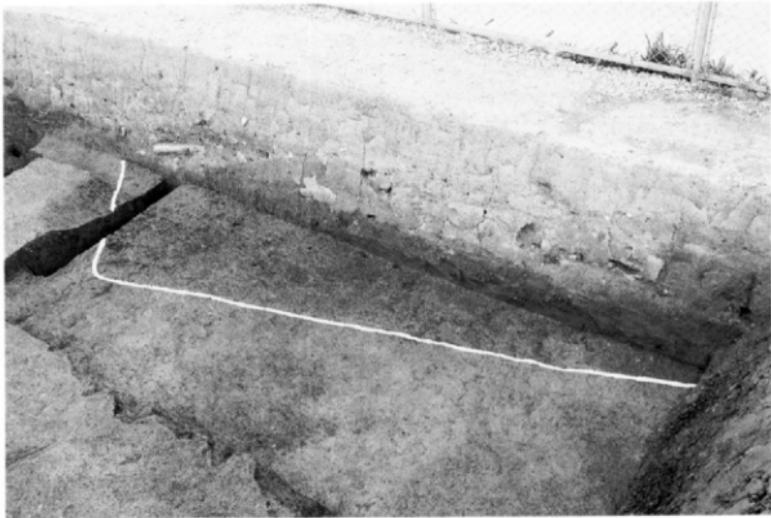
住居壁に沿って全周する周溝は、幅37~58 cm、深さ31~45 cmを測る。北西側のコーナー部分は幅が広くなっている。この部分に直径約30 cm のU字形のトンネルの煙出しを設けている。入口部分は焼土及び、炭化面がみられた。

このトンネル状煙出し煙道は、全長約4 m、幅約30 cmを測り、やや蛇行しながら北側にのびる。トレンチ断面でみると、住居跡の隅角から約1.5 mまでは本来楕円形状のトンネルを呈していたものが陥没し、断面U字形状になったものと確認できる。また煙道底面は、住居跡隅角のトンネル入口部分から2.4 m地点までが徐々に深くなっている。その先は一段上がっている。その先が煙突につながる部分と考えられる。先端には、径22 cmのピットがあるので、煙突状器具が設置されていたことが考えられる。

遺物は、カマド内より土師器甕、床面から土師器甕・鉢、須恵器坏身・坏蓋・高坏脚・甕、赤焼土器、石製品などが出土している。

Tab. 1 梅林遺跡第4次調査竪穴住居跡一覧表

遺構名	形態	計測値(cm)			火気施設		煙突		出土遺物	時代	備考
		現存長	現存幅	壁高さ	有無	位置	有無	方向			
SC01	略方形	185 + a	670	20	○	北北東	—	—	土師器甕・鉢・壺、須恵器坏蓋・坏身・甕・鉢、石鐵	古墳時代	調査区境にある。
SC02	略方形	334 + a	566	39	○	西北西	○	北	土師器甕・鉢・壺、須恵器坏蓋・坏身・高坏・甕・鉢・瓶、石鐵、石槍	古墳時代	調査区境にある。
SC03	略方形	398 + a	140 + a	—	—	—	—	—	—	古墳時代	調査区境にあり、未掘のため不明



竪穴住居跡 SC03 検出状態（南西から）

SC03(Fig.10) 調査区の東隅に位置するが、未調査であるため規模、時期共に不明である。略南北長3.9m以上、東西長1.4m以上を測る。

(4) 壺穴住居跡出土遺物

SC01出土遺物(Fig.16・17) 7・8はカマド、9は上面カマド、5・10~12は周溝、その他は住居跡覆土から出土した。5~10は上部器で、5・7~10は甕、6は壺、11~18は須恵器で、11・14~16は壺蓋、12・13・17は壺身、18は鉢、19~22は石製品である。

5は甕口縁部片で、復原口径14.8 cmを測る。口縁部はくの字形を呈する。口縁部内外面はナデ調整、胴部外面はヨコハケ調整、内面はヘラケズリ調整である。6は口縁部片で、復原口径14.8 cmを測る。内外面ナデ調整である。7は口縁部片で、復原口径16.6 cmを測る。口縁部はゆるく外反する。外面はハケ後ナデ調整、口縁部内面はヨコ方向のハケナデ調整、胴部内面はナデ調整である。8・9は胴部片である。8は、外面は擬似格子目叩き後にヨコ方向のハケナデ調整、内面はヨコナデ調整である。9の外面はタテハケ調整、内面はナナメ方向のヘラケズリ調整を施している。10は口縁部片で、如意形を呈する。二次火を受けており、内外面磨滅している。

11は壺蓋の完成品である。口径11.0 cm、器高3.4 cmを測る。口縁端部をやや外につまみ出す。内外面回転ナデ調整。大井部外面は左回りの回転ヘラケズリ調整を施す。12は復原口径12.2 cm、器高4.0 cmを測る。口縁部の立ち上がりはやや内傾する。天井部外面は右回りのヘラケズリ調整である。13は口縁部片で、復原口径12.4 cmを測る。蓋受け部は平底で、口縁部の立ち上がりは内傾気味である。内外面回転ナデ調整である。14~17は口縁部片である。14は口唇部内側に浅い沈線がめぐる。16の口縁部内側のかえりは小さい。内外面回転ナデ調整である。18は鉢の口縁部片で、復原口径15.0 cmを測る。口縁端部をやや外につまみ出す。内外面回転ナデ調整である。

19~21は打製石器で、22は打製石斧である。19はサヌカイト製の石槍、20・21は黒曜石製の石鎌である。19は一部に自然面を残しており、刃部調整は粗い。下部を欠く。20は刃部や器面彫整が粗く、未製品であると思われる。21は向脚部を欠く。22は玄武岩製である。欠損が著しく、調整は不明であるが、片面に一部研磨を施す。

SC02出土遺物(Fig.18・19) 23は下層カマド炉床下、32はカマド南側、25・39は煙道、41は煙出内ビット、その他は住居跡覆土から出土した。23は土師器で、23~25は甕、26は壺、27~40は須恵器で、27・28・30~32は壺蓋、29・34・35は壺身、36・37は広壺、33・38~40は甕、41~43は石製品である。

23は口径15.8 cm、器高35.1 cmを測る。カマドの構築材として用いられていたもので、外面に煤が付着している。胴部最大径が下位にあり、平底を呈する。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。内外面ナデ調整である。胴部外面はタテ・ナナメ方向のハケ目調整、内面はタテ・ナナメ方向のヘラケズリ調整、内底部には指頭圧痕が残る。24は復原口径17.2 cmを測る。口縁部はくの字形に強く外反し、内外面ナデ調整である。胴部外面はナナメ方向のハケ目調整で、内面はヘラケズリである。25は甕の底部片で、外面はハケ後ナデ調整、内面はヘラケズリ調整である。26は壺の口縁部片で、復原口径14.6 cmを測る。口縁部は直口気味で、内外面ナデ調整を施す。

27~40は須恵器である。27は復原口径15.4 cmを測る。内外面ナデ調整、天井部外面はヘラケズリ調整である。口唇部内側には浅い沈線がめぐる。28は復原口径14.0 cm、器高3.3 cmを測る。内外面回転ナデ調整、大井部外面は左回りのヘラケズリ調整である。29は復原口径14.0 cm、器高4.0 cmを

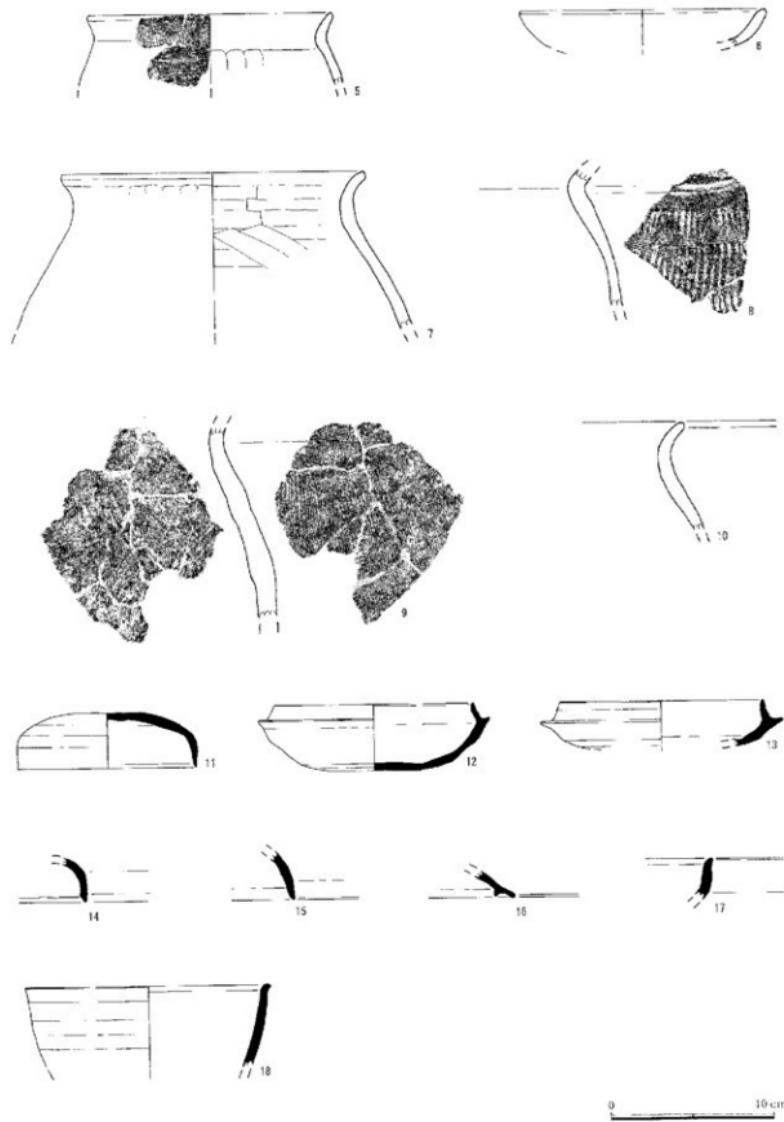


Fig.16 堅穴住居跡 SC01出土遺物実測図（縮尺1/3）

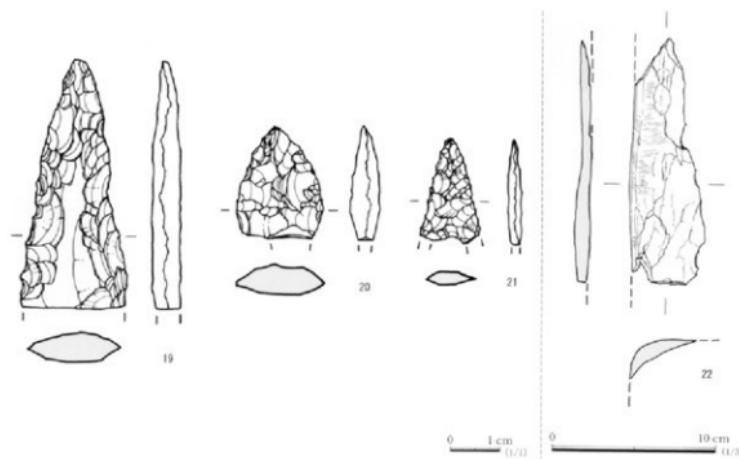
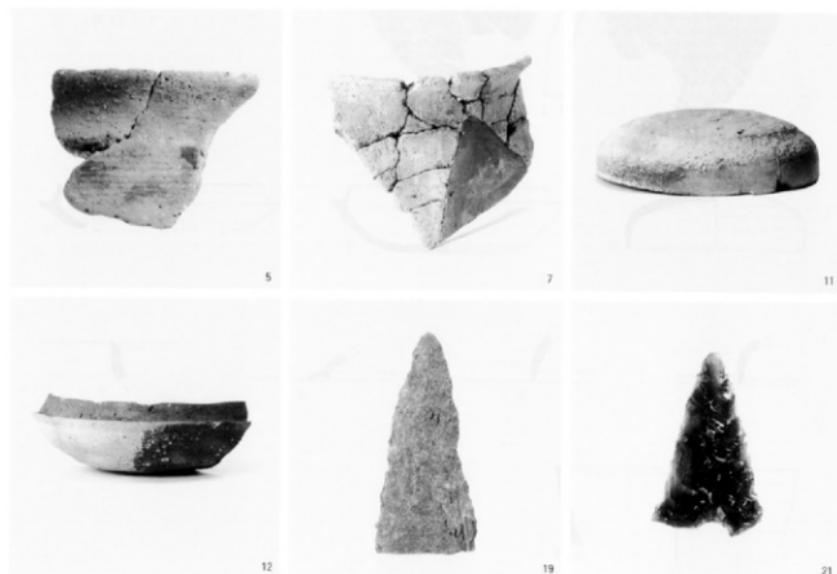


Fig.17 堪穴住居跡 SC01出土石製品実測図（縮尺1/1・1/3）



堪穴住居跡 SC01 出土遺物

※ 数字は実測番号に一致する。

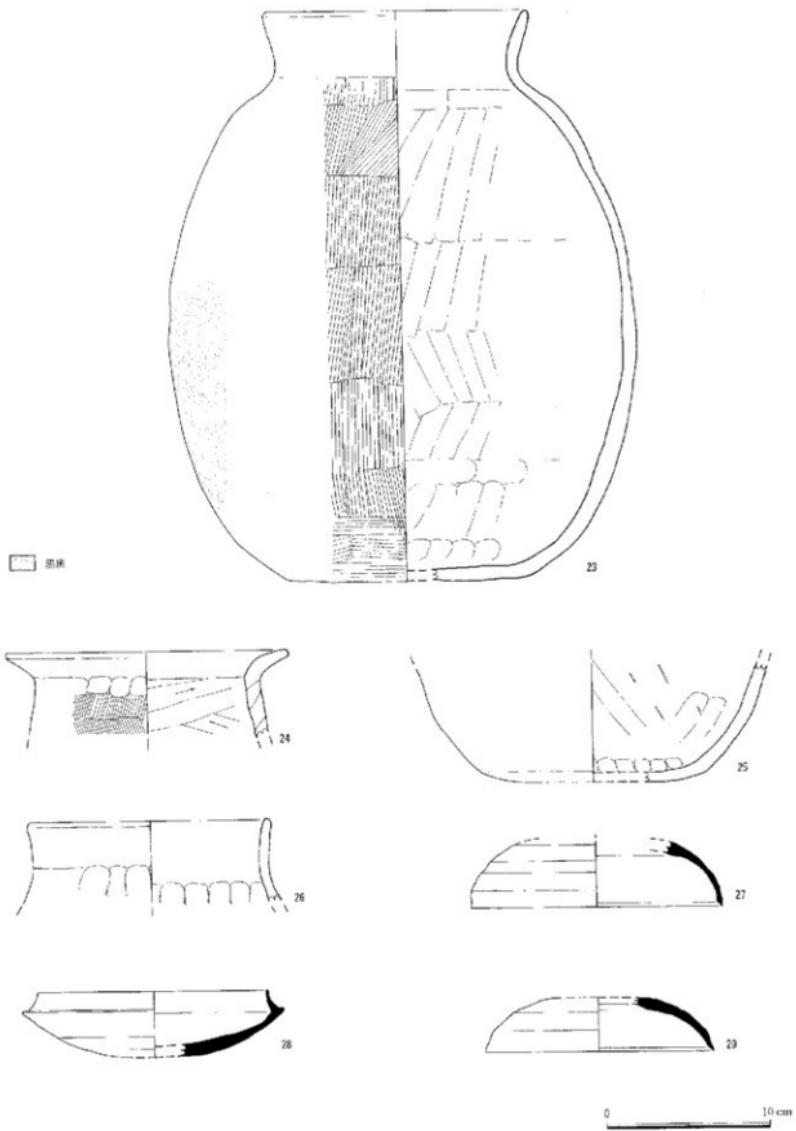


Fig.18 壁穴住居SC02出土遺物実測図① (縮尺1/3)

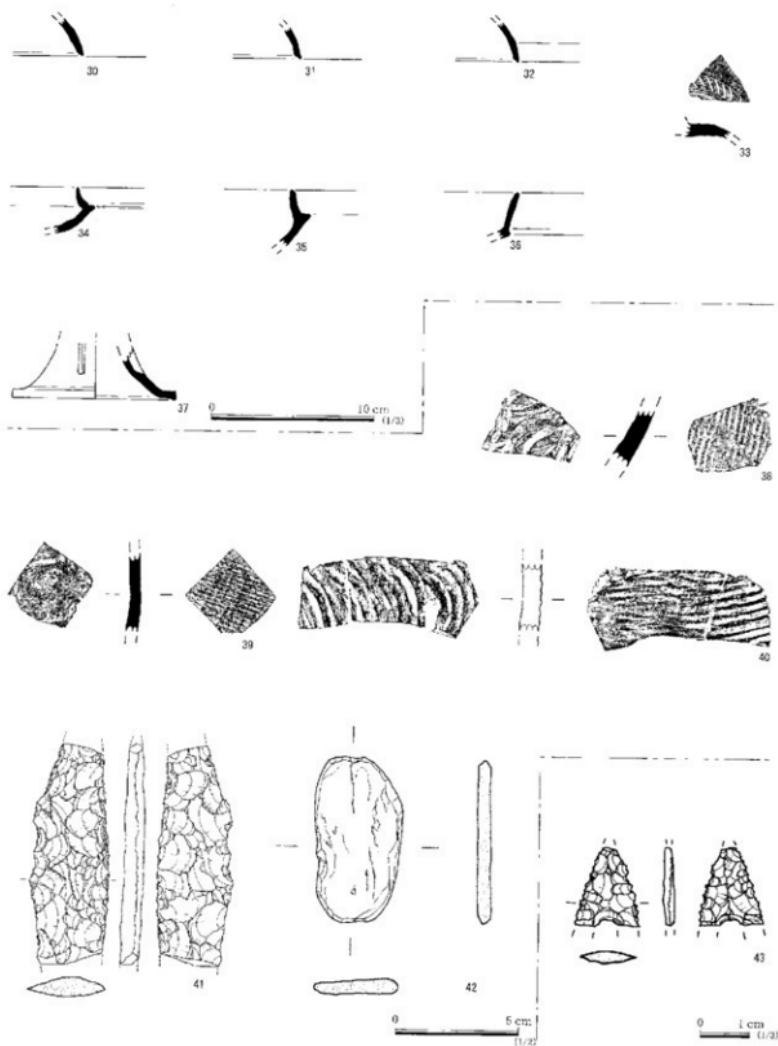
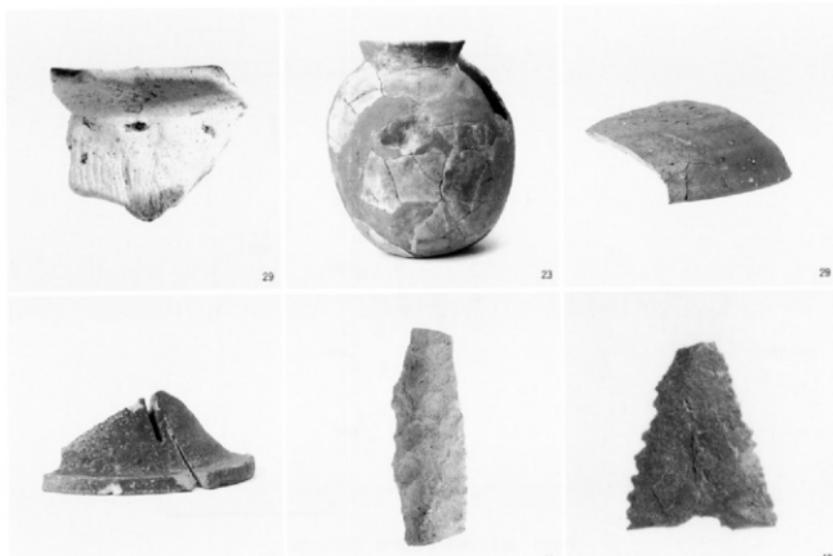


Fig.19 半穴住居跡 SO02出土遺物実測図② (縮尺1/3・1/2・1/1)



豊穴住居跡 SC02 出土遺物

※ 数字は文圖番号に一致する。

測る。口縁部の立ち上がりはやや内傾し、蓋受けは小さい。内外面回転ナデ調整、底部外面は左回りのヘラケズリ調整である。31・32はいずれも口唇部内側に段をなす。33は蓋天井部片で、外面に横目状の刻み目を施す。34の口縁部の立ち上がりは内傾し、蓋受けに沈線がめぐる。内外面回転ナデ調整である。35の口縁部の立ち上がりは直立気味で、蓋受けは小さく、平坦である。36の口縁部は外反気味で、体部との境に段をなす。37は高环脚部片で、底径10.0 cmを測る。透かしを施す。内外面回転ナデ調整である。38~40は胴部片で、外面の器面調整は、38が平行叩き、39が擬似格子目叩き、40が格子目叩き、内面は38・40が青海波の当て具痕、39が同心円の当て具痕を残す。

41は煙道内ピットより出土した。サヌカイト製の石檻である。刃部先端と基部を欠いている。全面の剥離調整は丁寧である。42は石錘で、扁平な自然石を用い4カ所に紐掛けの欠き込みをつけている。43はカマド内に設定したトレンチから出土した。サヌカイト製の打製石鎧である。刃部先端と両脚部の先端を欠いている。

(5) 挖立柱建物跡 (SB)

全部で5棟検出した。内訳は倉庫跡と考えられる総柱建物が1棟、居宅建物と考えられる側柱建物が4棟である。掘立柱建物跡SB05は、住居跡SC02を囲む柵状遺構とも考えられる。掘立柱建物跡SB01は、東西両側に庇（下屋）が付く可能性がある。いずれも削平を受けて遺存状態は悪く、時期の確定は困難であるが、掘方形状や整地層の出土遺物により古墳～奈良時代までの幅が考えられる。



Fig.20 掘立柱建物跡配置図（縮尺1/300）



掘立柱建物跡 SB01～05 （南から）

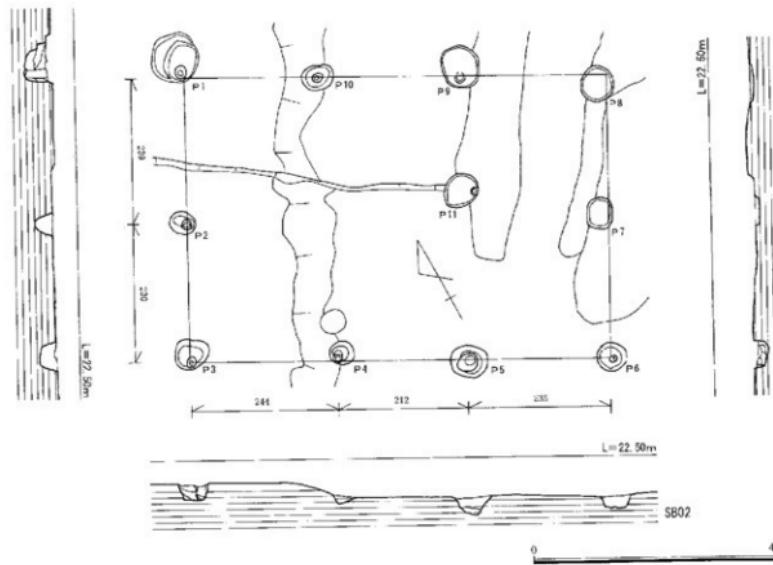
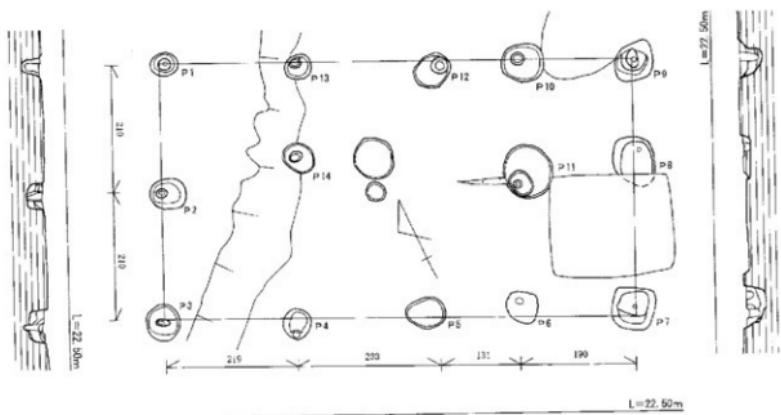
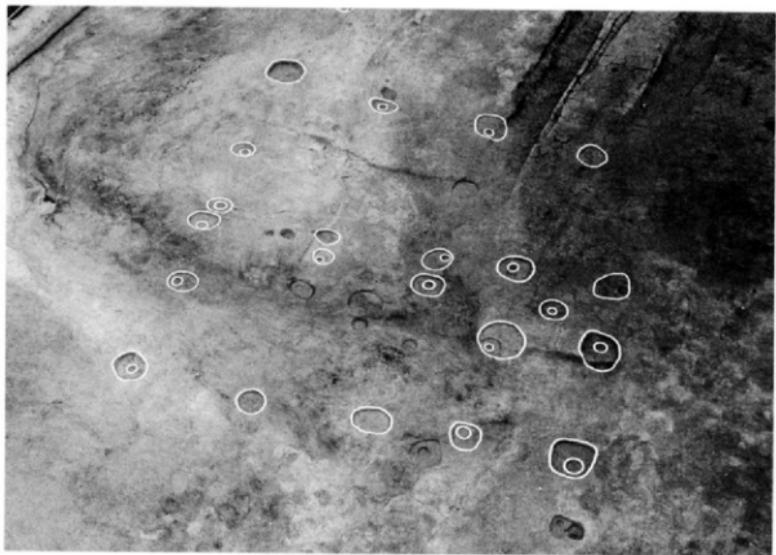
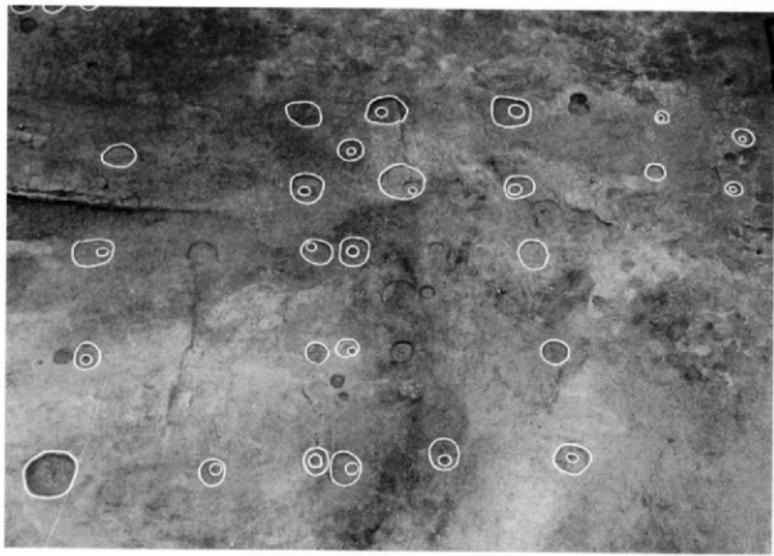


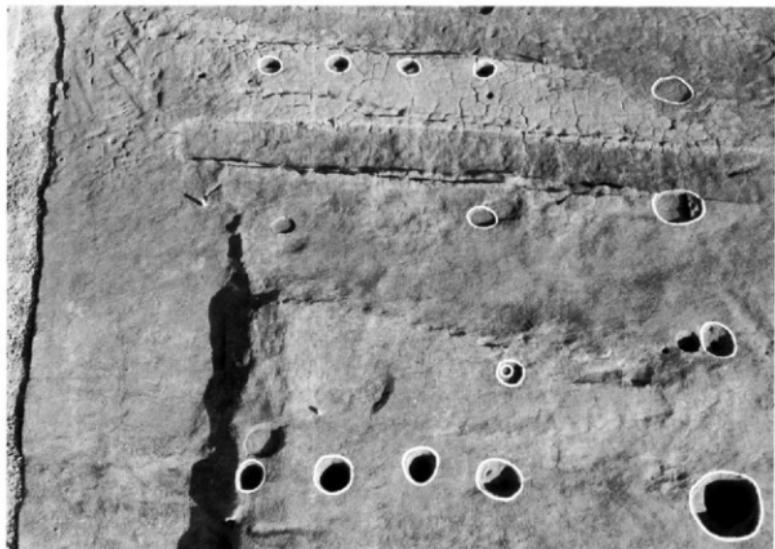
Fig.21 掘立柱建物跡 SB01・02実測図 (縮尺1/80)



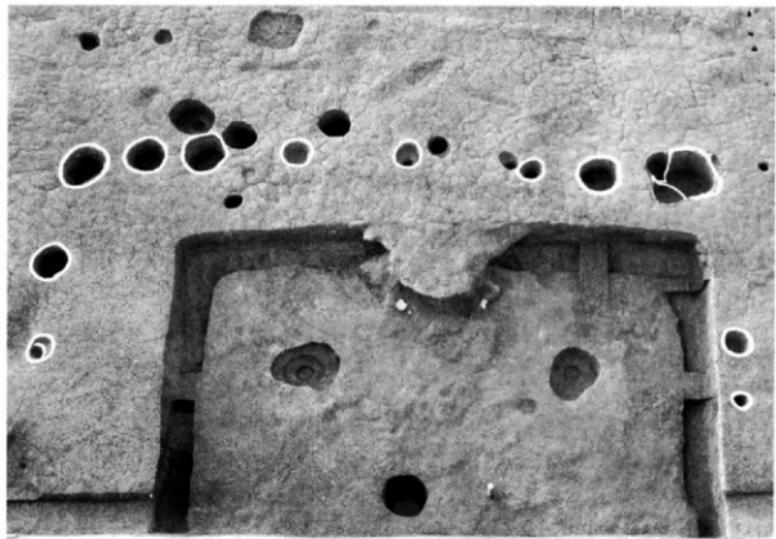
掘立柱建物跡 SB01・02 (南から)



掘立柱建物跡 SB01・02・04 (西から)



掘立柱建物跡 SB03 (西から)



掘立柱建物跡 SB05 (東から)

柱穴の平面形は、不整円形、隅丸方形、及び椿円形状を呈する。柱穴の規模は、直径20~80 cmを、柱根径は12~14 cmを測る。

SB01(Fig.20・21) 調査区のはば中央に位置し、削平が著しい。掘立柱建物跡 SB02と切り合い関係にある。側柱建物であるが、東西両側に庇状となる柱穴 P11・P14が存在する。略東西方向の建物で、梁行2間、桁行4間の規模である。梁行は420 cm、梁間平均は210 cm（約6.9尺）で、桁行は773 cm、桁間平均は約193 cm（約6.4尺）を測る。桁間の間隔は均等ではない。東西両側に庇が存在するとすれば、その規模は1間×2間の規模で、柱間は本体の建物の主柱間隔に一致する。

柱穴掘方の平面形は、不整円形、椿円形、隅丸方形を呈している。柱穴の直径は34~86 cmを、柱根径は平均で12 cmを測る。

遺物は、土師器壺、須恵器壺身・壺蓋、黒曜石の石鏃などが出土している。

SB02(Fig.20・21) 調査区の中央に位置し、削平が著しい。掘立柱建物跡 SB01と切り合い関係にある。側柱建物である。略東西方向の建物で、梁行2間、桁行3間の規模である。東側に庇状となる柱穴 P11が存在する。梁行は469 cm、梁間平均は234.5 cm（約7.8尺）で、桁行は691 cm、桁間平均は20 cm（約7.7尺）を測る。

柱穴掘方の平面形は、不整円形、又は椿円形状を呈している。柱穴の直径は38~84 cmを、柱根径は平均で14 cmを測る。

遺物は、土師器、須恵器壺蓋などが出土している。

SB03(Fig.20・22) 調査区の北側に位置し、近代の排水溝などの段落ちによって北側を削平されているため、全体規模は不明である。また南側桁行の柱穴を欠いている。側柱建物である。略東西方向の建物で、梁行3間である。桁行は現存では3間であるが、5間規模と考えられる。梁行は328 cm、梁間平均は109 cm（約3.6尺）で、桁行は693 cm、桁間平均は現存で231 cm（約7.6尺）5間規模では約138 cm（約4.6尺）を測る。

柱穴掘方の平面形は、不整円形、又は椿円形状を呈している。柱穴の直径は28~54 cmを、柱根径は平均で14 cmを測る。覆土は、やや褐色がかった粘質土であるが、ほとんどの柱穴にしっかりと焼土を含んでいた。

遺物は、黒曜石が出土している。

SB04(Fig.20・22) 調査区の南側に位置する。削平が著しい。略南北方向の建物で、倉庫跡と考えられる。梁行1間、桁行1間の規模である。梁行は130 cm（約4.3尺）、桁行は165 cm（約5.4尺）を測る。

柱穴掘方の平面形は、不整円形、又は隅丸方形を呈している。柱穴の直径は22~42 cmを、柱根径は平均で12 cmを測る。

遺物は、土師器、須恵器などが出土している。

SB05(Fig.20・22) 調査区の東側に位置する。住居跡 SC02を囲むような形で存在する。梁行1間以上、桁行6間以上の規模である。梁間は240 cm（8尺）、桁行は694 cm、桁間平均は約116 cm（約3.8尺）を測る。桁行南側の柱穴は住居跡と重複するため検出できておらず不明である。住居跡 SC02の

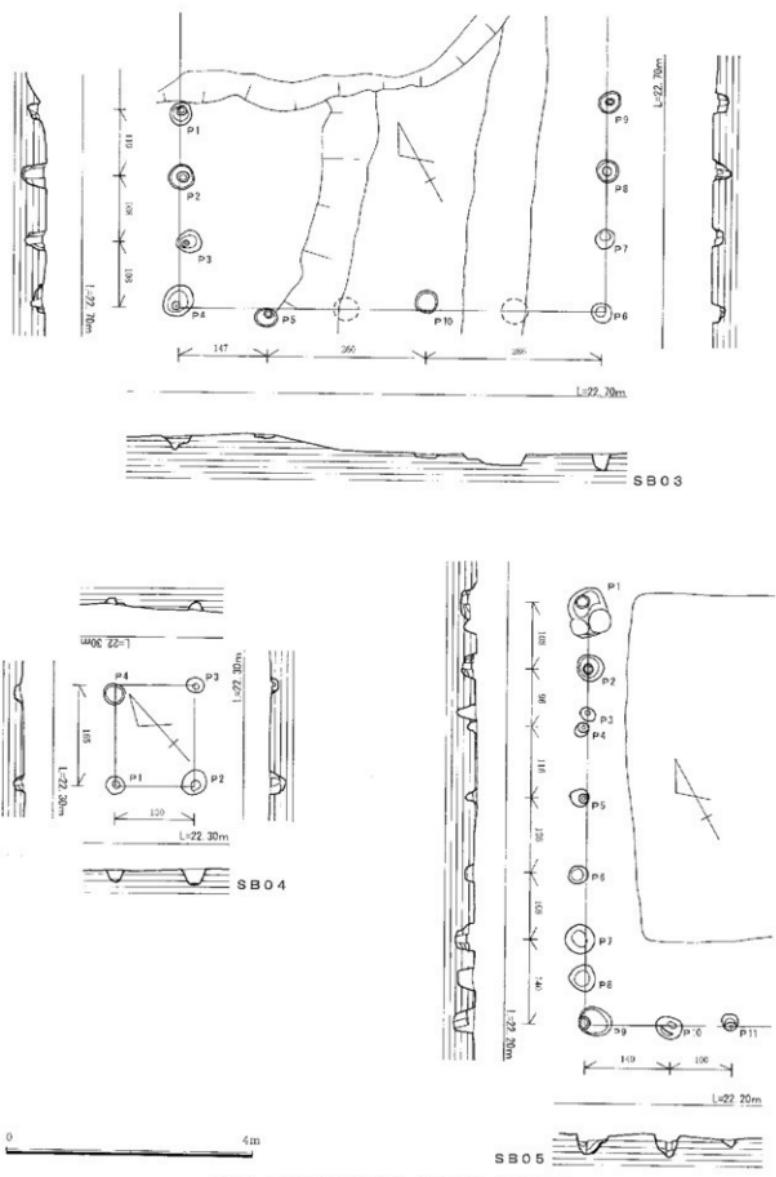


Fig.22 掘立柱建物跡 SB03~05実測図 (縮尺1/80)

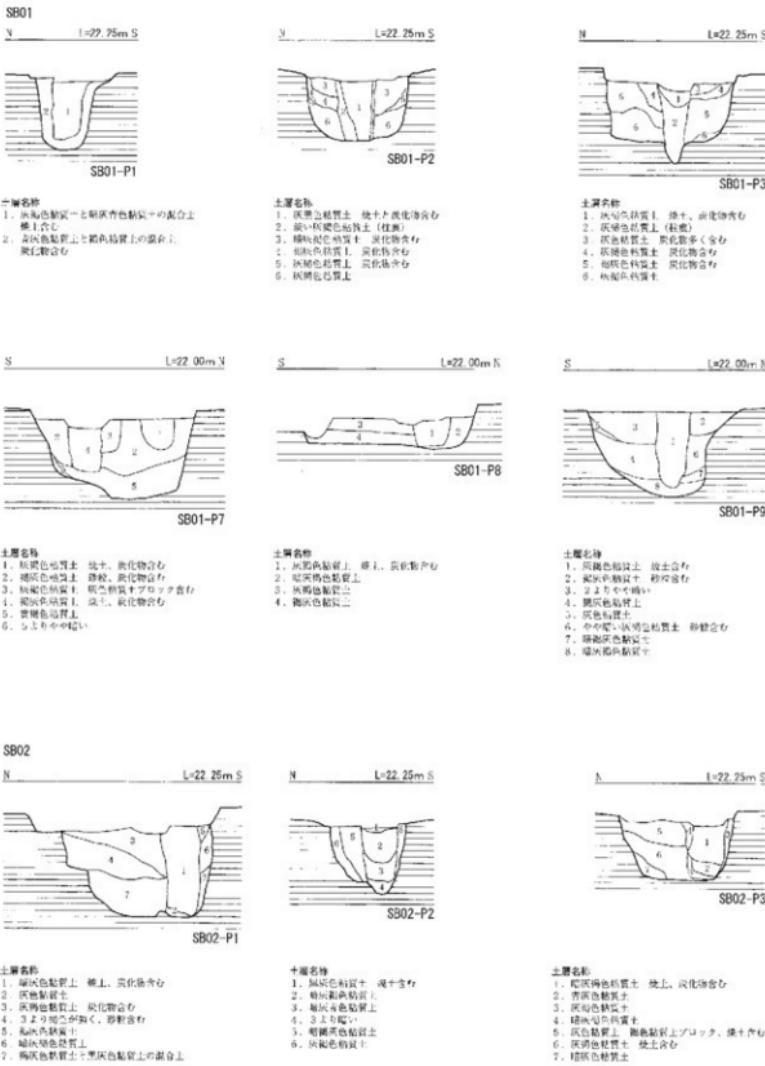


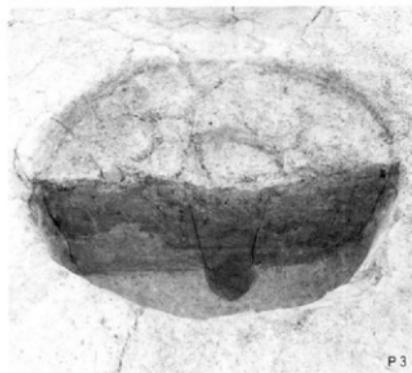
Fig.23 掘立柱建物跡 SB01・02柱穴土層実測図 (縮尺1/20)



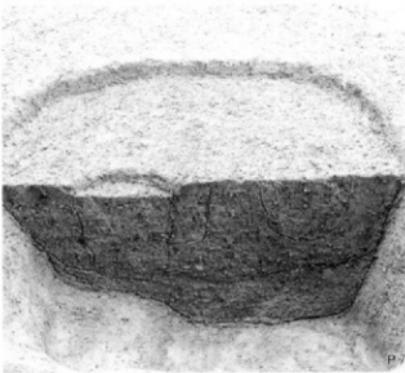
P1



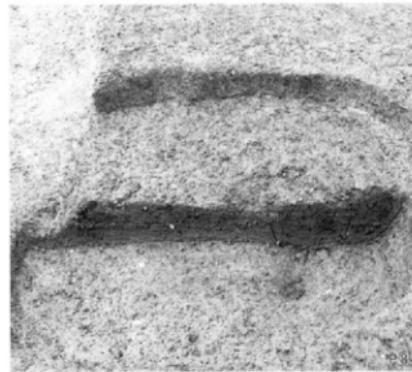
P2



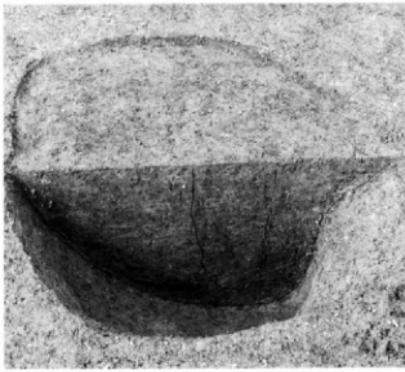
P3



P4



P5



P6

掘立柱建物跡 SB01柱穴断面の土層の状態

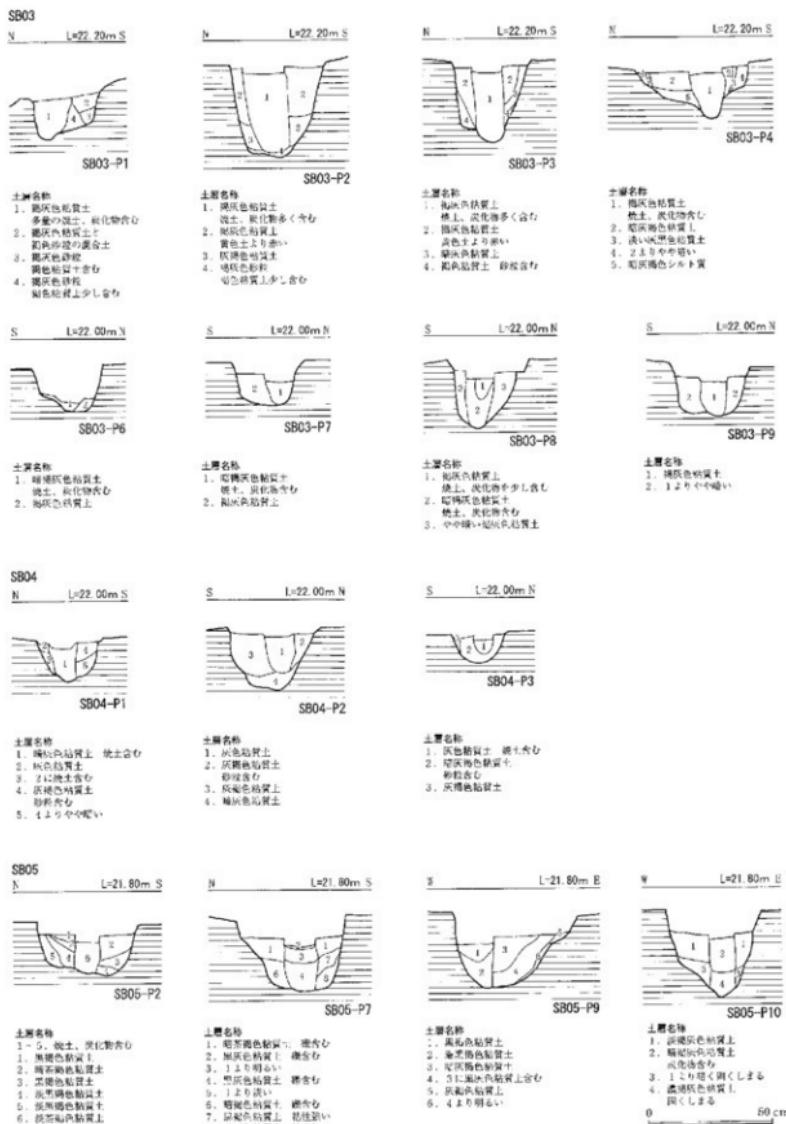
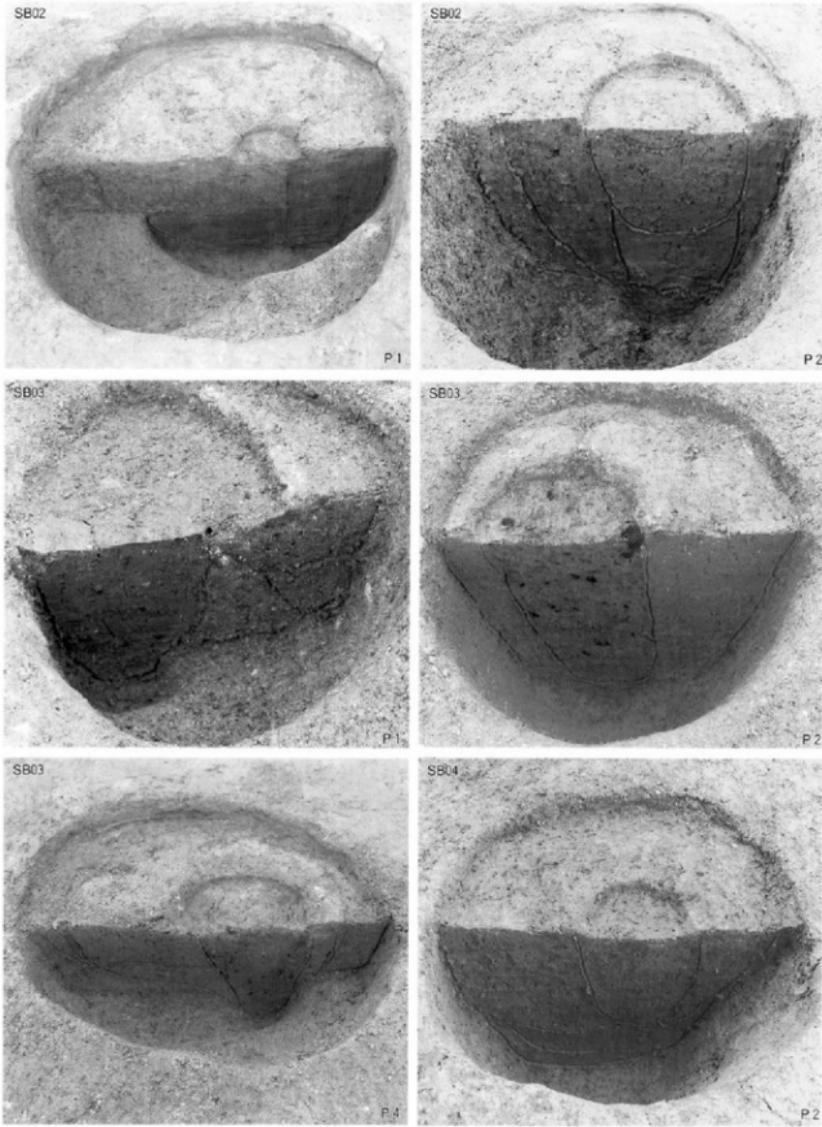


Fig.24 捷立柱建物跡 SB03~05柱穴土壤剖面圖 (縮尺1/20)



掘立柱建物跡 SB02～04柱穴断面土層の状態

Tab. 2 梅林遺跡第4次調査掘立柱建物跡一覧表

透構名	規模	桁行		梁行		方位	床面積 (m ²)	Pit. 数	柱穴状況(cm)				出土遺物	備考
		実長	柱間寸法	実長	柱間寸法				深さ	長径	短径	柱直径		
SB01	2×4	773 (25.8)	193 (6.4)	420 (13.9)	210 (6.9)	N68°W	15.29	13	14~72	42~86	34~76	12	土師器蓋、須恵器坏身、黒曜石石錐	側柱建物。東・西側庇付くか?
SB02	2×3	691 (22.8)	234.5 (7.8)	469 (15.5)	230 (7.7)	N62°W	32.41	10	32~50	40~84	38~78	14	上師器、須恵器坏蓋	側柱建物。東側庇付くか? 術行の柱間が不均等。
SB03	3×3 + a	693 (22.9)	231 (7.6)	328 (10.9)	109 (3.6)	N62°W	19.33	10	20~40	34~54	28~44	14	黒曜石	側柱建物。北側前平。桁行の柱穴を欠く。
SB04	1×1	165 (5.5)	165 (5.5)	130 (4.3)	130 (4.3)	N48°W	2.15	4	13~26	27~42	22~37	12	上師器、須恵器	食庫。
SB05	2+a ×4	694 (22.9)	116 (3.8)	240 (8)	120 (4)	N28°E	9.72	11	20~36	28~80	20~64	12	土師器	側柱建物又は、SC02住居跡に付属する構か?

柱跡遺構の可能性も考えられるが、南北方向が住居跡に近接しているため構造上の課題がある。

柱穴掘方の平面形は、不整円形状を呈している。柱穴の直径は20~80 cmを、柱根径は平均で12 cmを測る。

遺物は、土師器が出土している。

(6) 掘立柱建物跡出土遺物

SB01出土遺物(Fig.25) 44・47はP10、45・48はP2、46はP3から出土した。44・45は土師器で、44は鉢、45は壺、47・48は須恵器で、47は坏蓋、48は坏身である。46は石製品である。

44は復原口径14.2 cmを測る。丸底の鉢で外面はヨコナデ、内面は指ナデ調整で、下部に指頭圧痕が残る。45は小型壺の口縁部片である。外面は表面剥離のため、調整は不明。内面には指頭圧痕が残る。

47は口縁端部を欠くが、復元口径13 cmと考えられる。内外面回転ナデ調整、天井部外面は回転ナデ調整である。焼成はあくまで、内外面磨滅している。48は復原口径11.4 cmを測る。口縁部の立ち上がりは厚みが薄く、内傾する。蓋受け部に沈線がめぐる。内外面回転ナデ調整である。

46は黒曜石製の打製石錐で、脚は丸みをもっている。刃部先端と片方の脚を欠く。

SB02出土遺物(Fig.25) 49はP2、50はP1から出土した。49・50共に須恵器の坏蓋である。49は復原口径12.2 cmを測る。口唇部内側に浅い沈線がめぐる。内外面回転ナデ調整である。50は復原口径14.5 cmを測る。内外面回転ナデ調整を施す。

(7) 檇跡 (SA)

2列の柱穴で構成され、東西から南北方向に曲がる矩形の檇状遺構を検出した。遺存状態は悪い。

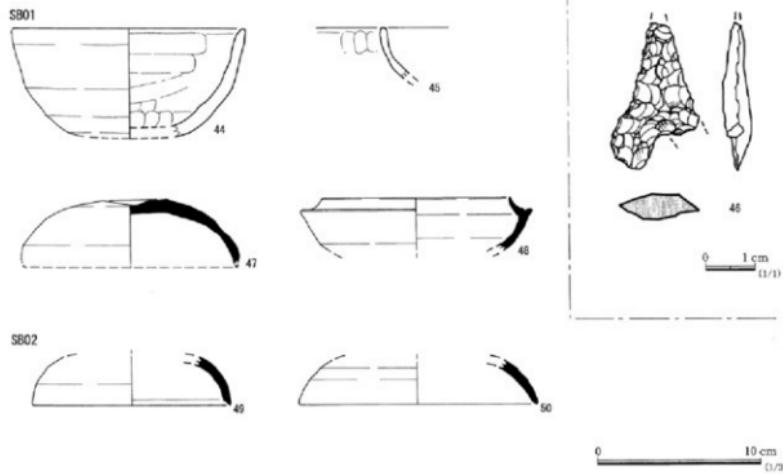
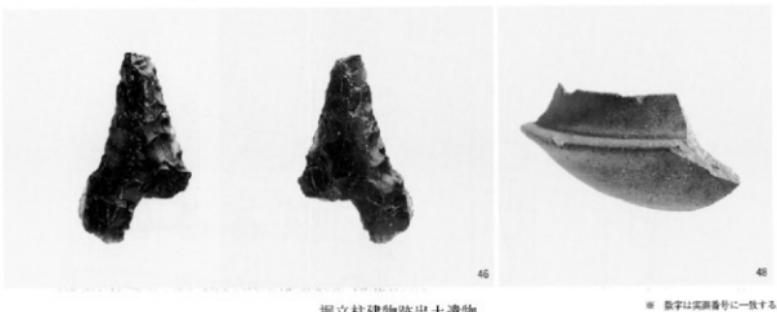


Fig.25 挖立柱建物跡出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）



掘立柱建物跡出土遺物

* 数字は実測番号に一致する。

SA01 (Fig.27) 調査区の北東隅で検出した。境界地にあるため全体形は不明である。構跡の規模は、東西4間 (3.6m) 以上、南北3間 (3.3m) 以上である。柱列間は95~135cm、柱間は80~135cmを測る。東西方向の軸をE27°Sにとり、南北方向の軸をN23°Eにとる。当初は掘立柱建物跡の一部であると考えていたが、平行した2列の柱穴の柱筋が通らず、コーナー部分を中心にして対応する柱が徐々にズレることから、東西方向から南北方向に矩形に曲がった構跡であると判断した。この構跡が掘立柱建物跡群を囲むものかは現状では不明であり、別の構造物である可能性も否めない。

柱穴掘方の平面形は、不整円形、又は隅丸長方形状を呈している。柱穴の直径は36~76cmを、柱根径は平均で14cmを測る。

遺物は、弥生土器壺、土師器壺・壺、須恵器坏身・坏蓋・壺、石製品などが出土している。

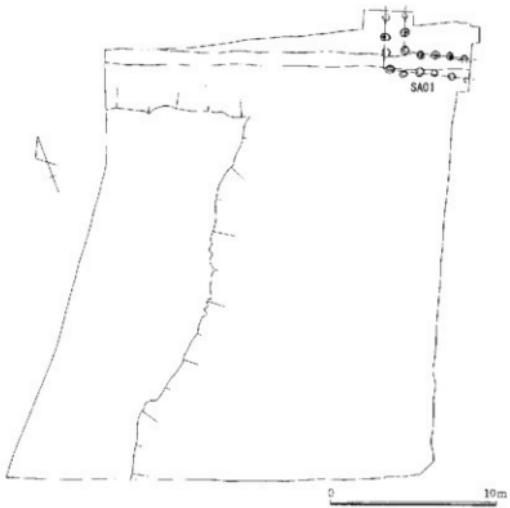


Fig.26 横跡配置図（縮尺1/300）

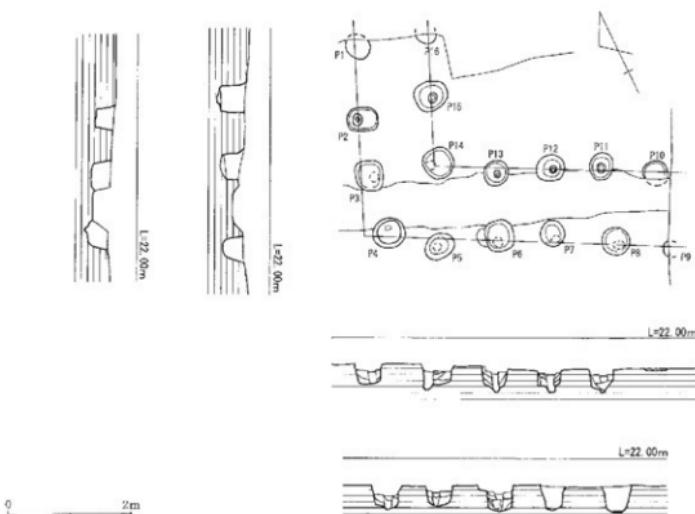
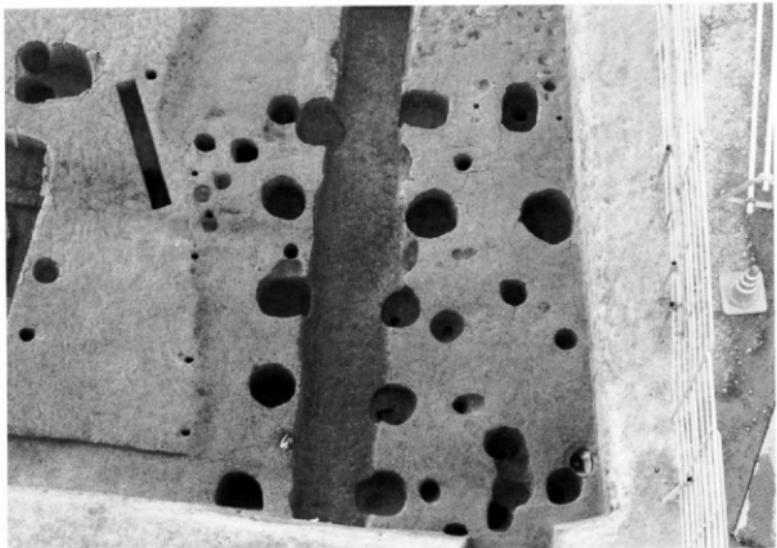
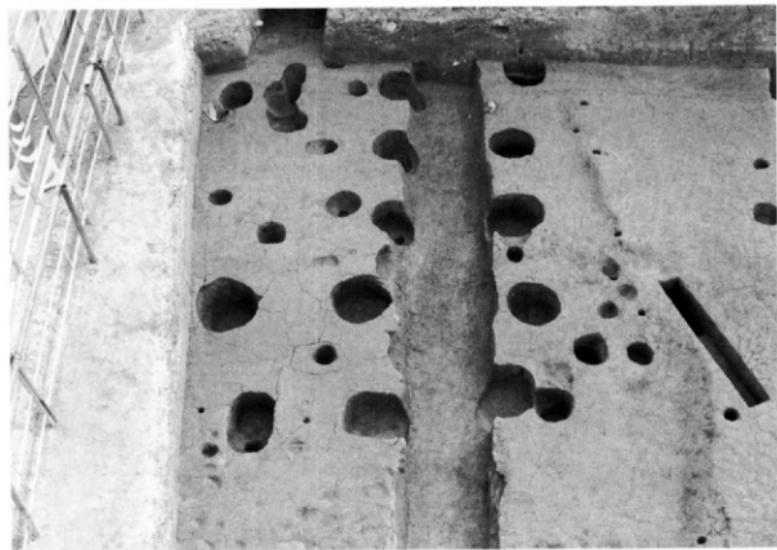


Fig.27 横跡SA01実測図（縮尺1/80）



橋脚 SA01 (東から)



橋脚 SA01 (西から)

(8) 樋跡出土遺物

SA01出土遺物(Fig.28) 51はP13、52はP14、53はP3、54・55・56はP15から出土した。51は弥生土器甕、52・54～55・56は須恵器で、52・54は壺蓋、55は壺身、56は甕、53は石製品である。

51は底部片で、復原底径6.2 cmを測る。やや上げ底で、内外面ナデ調整である。指頭圧痕が残る。52は壺口縁部片で、赤焼け土器である。復原口径14.4 cmを測る。口唇部内側に段がつく。54は復原口径12.2 cmを測る。体部と天井部との境に段をなす。天井部外面にはヘラ記号がみられる。内外面回転ナデ調整、天井部外面はヘラケズリ調整である。55は復原口径9.5 cmを測る。口縁部の立ち上がりは内傾し、蓋受けは小さく、平坦である。体部との境に段をなす。内外面回転ナデ調整、外底部はヘラケズリ調整である。56は胴部片で、外面は格子目叩き後、カキ目を施す。内面は青海波の当て具痕が残る。

53は黒曜石製の打製石器で、ナイフ形石器である。背面の面取り調整を丁寧に行っている。

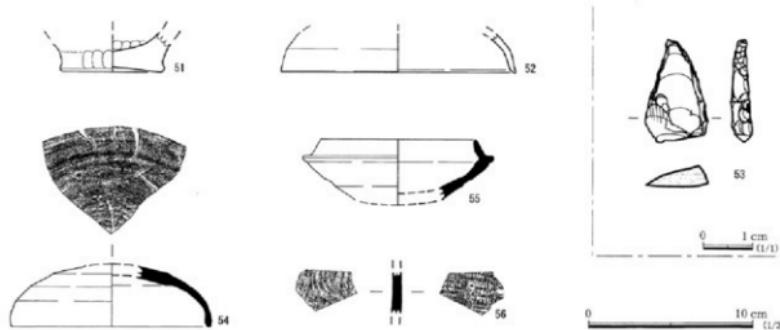


Fig.28 樋跡出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/1)



53

54

横 跡 出 土 遺 物

* 数字は実測番号に一致する。

(9) ピット出土遺物

ピット出土遺物(Fig.29) 57はSP01、58はSP02、59はSP124から出土した。58は土師器壺、57・59は須恵器で、57は甕、59は壺蓋である。

58は内外面ナデ調整である。口縁部はゆるく外反する。

59は口唇部内側に沈線がめぐる。内外面回転ナデ調整である。57はコの字形に口縁端部を肥厚させ、外反する。内外面回転ナデ調整である。

(10) トレンチ出土遺物

トレンチ出土遺物(Fig.29) 60は土師器壺、61～63・65～69は須恵器で、61は壺蓋、62は壺身、63は高坏、65は甕、66～69は甕、64は石製品である。

60は高台付き壺の底部片で、底径5.7 cm を測る。貼付け高台の断面形は三角形状を呈する。

61は口縁部片で、復原口径11.6 cm を測る。口唇部内側に沈線がめぐる。体部と天井部との境に明瞭な段をなす。内外面回転ナデ調整である。62は復原口径10.8 cm を測る。口縁部の立ち上がりは内傾し、蓋受けは小さい。内外面回転ナデ調整である。63は脚部と壺底部を欠く。復原口径13.0 cm を測る。内外面回転ナデ調整で、底部との境に明瞭な段をなす。65は復原口径20.0 cm を測る。外反する口縁部の外面を肥厚させ、沈線を施す。内外面ナデ調整である。66～69は甕である。器面調整は、66の外面は格子目印き、内面は同心円の当て具痕、67の外面は擬似格子目印き後カキ目消し、内面は青海波の当て具痕、68の内面は青海波の当て具痕、69の外面はヨコナデ、内面は格子目印き後、ナデ消しを施す。

64は黒曜石製である。厚手の剥片で、コアと考えられる。欠損している。

(11) 搅乱壙出土遺物

搅乱壙出土遺物(Fig.29) 70～75は須恵器で、70は壺蓋、71は壺、72～75は甕である。

70は口縁端部を欠く。71は高台付き壺の底部片で、高台径7.0 cm を測る。体部と底部との境に段をなす。内外面回転ナデ調整である。72の外面は格子目印き、内面は青海波の当て具痕、73の外面は格子目印き、74の外面は格子目印き、内面は同心円の当て具痕、75の外面は擬似格子目印き、内面は青海波の当て具痕を残す。

(12) 包含層出土遺物

包含層出土遺物(Fig.30) 76は土師器支脚、77～93は須恵器で、82～84は壺蓋、77は壺身、78～81は高台付き壺、85～87は壺蓋つまみ、88は瓶、89～93は甕である。

76は支脚で、下部を欠く。外面はナデ調整で、面取りを行い、一部に指顎圧痕が残る。内面はタテ方向のナデ調整である。

77は復原口径12.9 cm を測る。口縁部の立ち上がりはやや内傾する。78～81の貼付け高台の断面形はコの字形を呈する。底径は78は10.0 cm 、79は9.8 cm 、80は9.2 cm 、81は6.0 cm を測る。内外面回転ナデ調整である。82の壺蓋のかえりは小さく、三角形状を呈し、内側に付く。内外面回転ナデ調整で

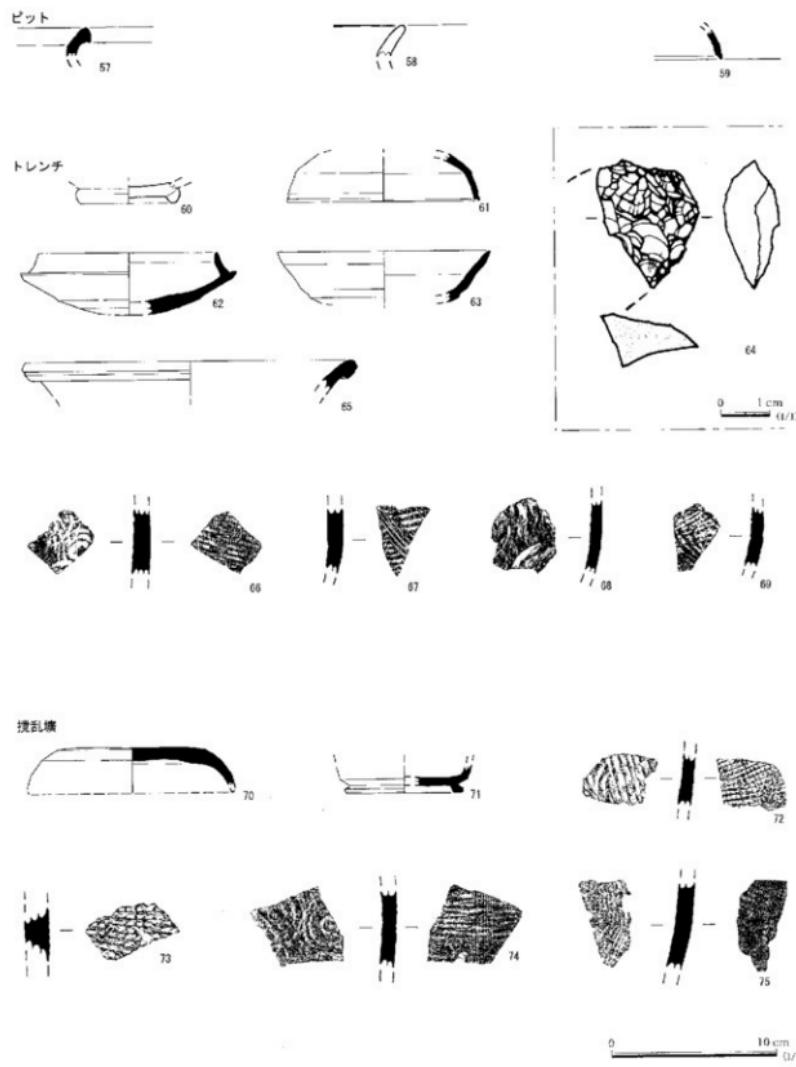


Fig.29 ピット・トレンチ・擾乱土出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/1)

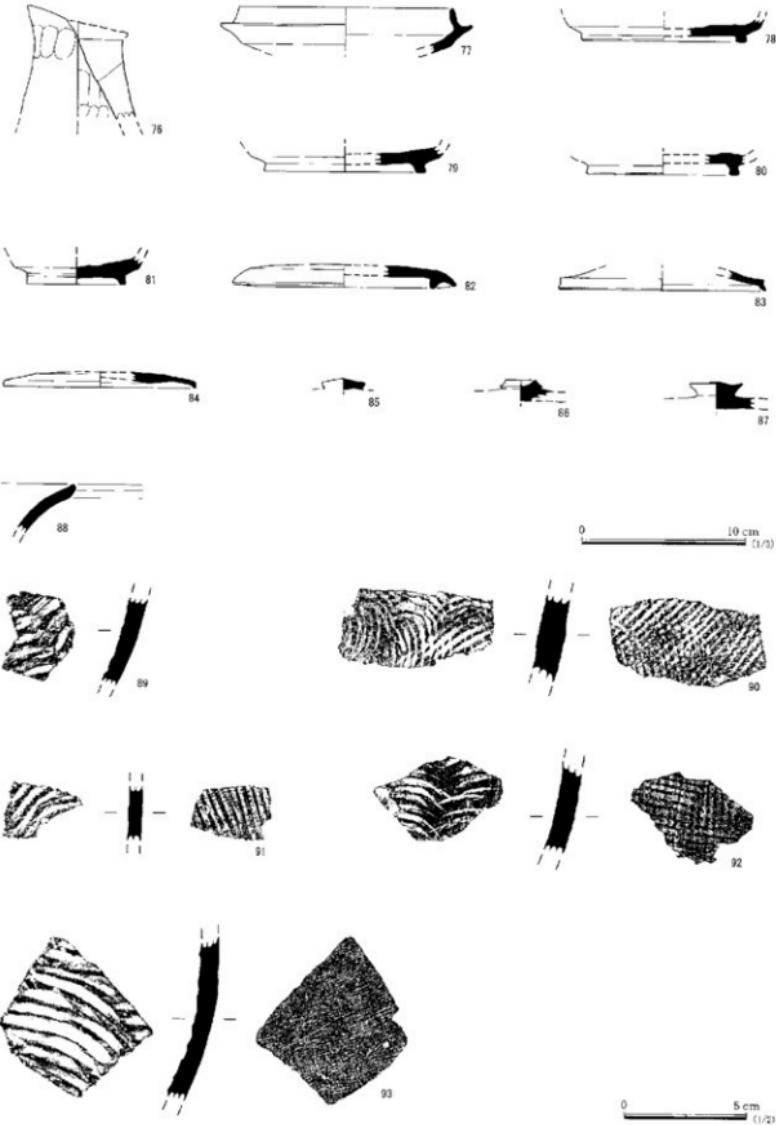


Fig.30 包含層出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/2)

ある。復原口径13.3 cm、器高1.3 cmを測る。83は復原口径12.6 cm、口縁端部をつまみ出し、平坦面を形成する。84は復原口径11.6 cm、器高0.9 cmを測る。口縁端部を内側につまみ出して肥厚させるが、やや丸みをもつ。内外面回転ナデ調整である。85～87は坏蓋片のつまみ部分で、いずれも擬宝珠形を呈する。内外面回転ナデ調整である。88は口縁部片で、外反する。内外面ヨコナデ調整である。89～93の窓片の器面調整は、外面は90～92が格子目叩き、89・93が叩き後ハケナデ調整、内面は青海波の当て具痕を残す。

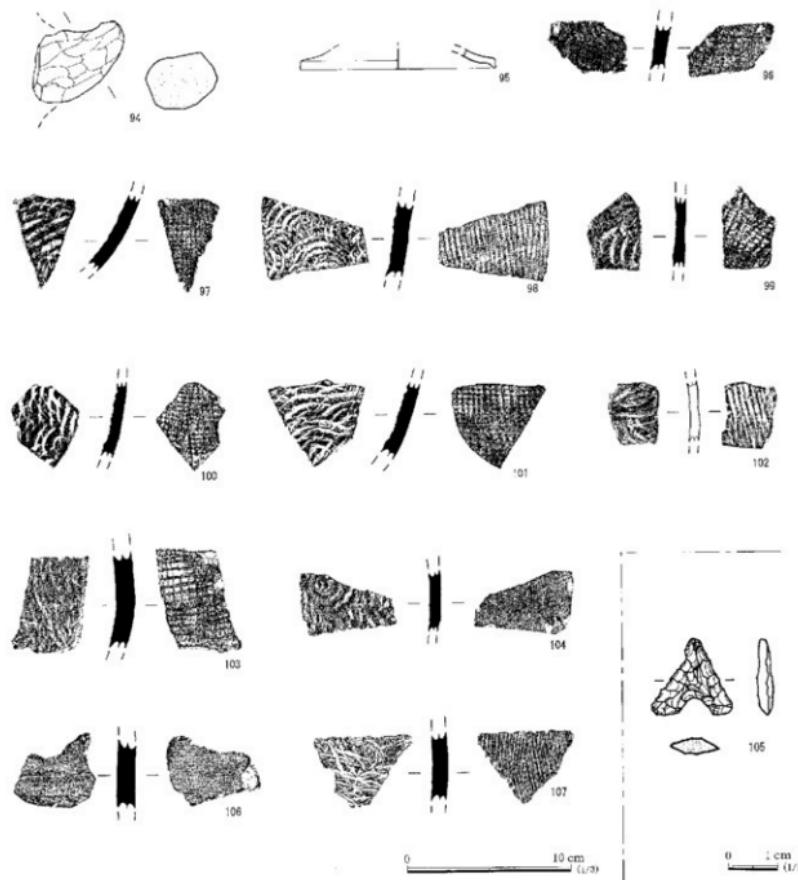


Fig.31 整泊層出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/1)

(13) 整地層出土遺物

整地層出土遺物(Fig.31) 94は土師器、95は瓦質土器坏蓋、96~104・106・107は須恵器で甕、105は石製品である。

94は甕の把手で、指圧痕が残る。やや扁平な断面形状を呈する。

95は復原口径12.0 cmを測る。蓋片と思われるが、外面は磨滅している。内外面ナデ調整、焼成は軟質である。

96~104・106・107は甕部片である。器面調整は、外面は96・97・99~101・103は格子目叩き、98が擬似格子目叩き、102・104が平行叩き、104は叩き後ナデ消している。106はヨコ方向の回転ナデでカキ目が残り、107はタテ方向のハケナデ調整である。内面は96~103・107が青海波の當て具痕、104は同心円の當て具痕、106はヨコナデ調整である。

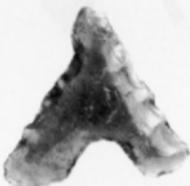
105は黒曜石製の打製石鎌である。正三角形状を呈し、刃部調整を丁寧に行っている。

(14) 遺構面出土遺物

遺構面出土遺物(Fig.32・33) 108は土師器、109~129は須恵器で、109・110・113・114は坏蓋、111・112は高台付き坏、115~129は甕、130~135は石製品である。

108は甕の把手で、接合は貼付式である。上面に幅7.5 mm、長さ1.6 cm、深さ2 cmの縱長の溝が切り込まれる。指圧痕が残り、指ナデ調整である。

109は天井部と口縁端部を欠く。体部と天井部との境に明瞭な段をなす。内外面回転ナデ調整、天井部外面は右回りのヘラケズリ調整である。111・112は底部片で、高台底径は111が9.0 cm、112が6.7 cmを測る。高台と体部との境に段をなす。貼付高台の断面形は四角形状を呈する。113・114の坏蓋つまみは、扁平な擬宝珠形を呈する。内外面ナデ調整である。115は肩部片である。外面はヨコ方向のハケナデ調整、内面上位はヨコナデ、下位は青海波の當て具痕が残る。116は外面に沈線をめぐらせ波状文を施している。117~129の器面調整は、外面は117~124が格子目叩き、123は叩き後ハケナデ、125~127は擬似格子目叩き、125は叩き後カキ目消し、128は平行叩き、129はヨコ~ナメ方向のハケ目調整である。内面は117・118・120~122・126~129が青海波の當て具痕、123が平行叩き、124・125が同心円の當て具痕を残す。119は磨滅のため調整は不明である。



105



116



132

整地層・遺構面出土遺物

* 数字は実測値に一致する。

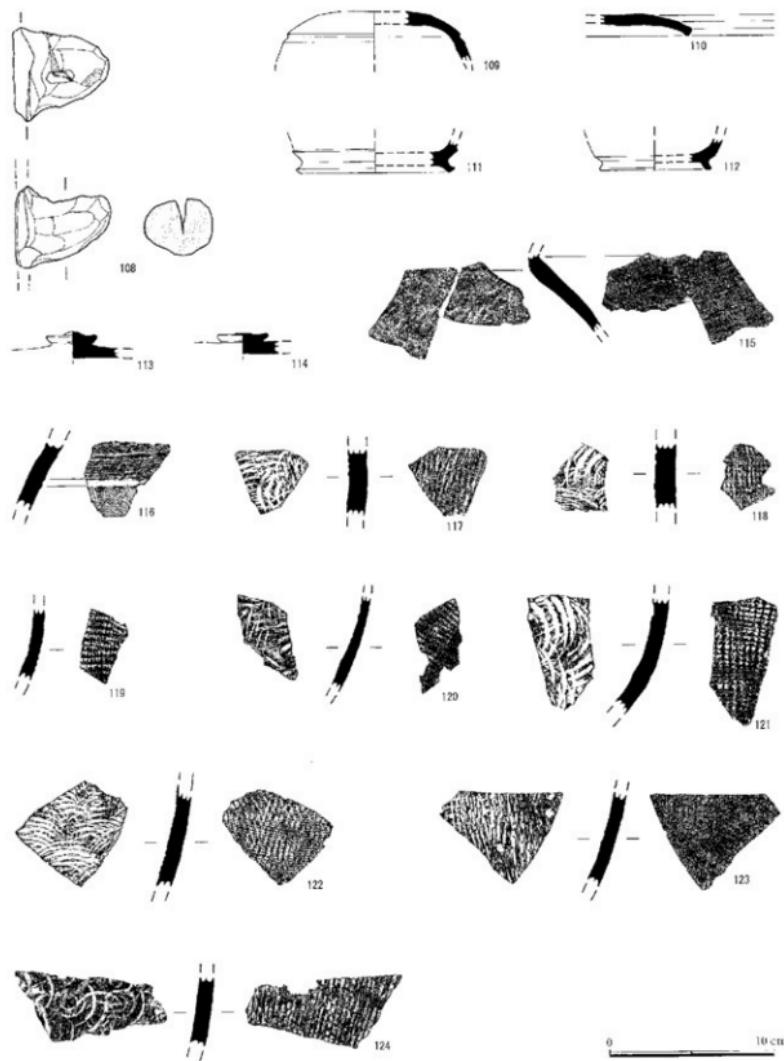


Fig.32 遺構面出土遺物実測図① (縮尺1/3)

130は花崗岩製の敲き石と考えられるが、両端や側辺の欠き込みより石錐としての利用も考えられる。表面に貝殻付着痕がみられる。131～134は打製石錐である。131はチャート製で、脚を欠いている。断面は菱形状である。132～134は黒曜石製で、132は両脚部を欠いている。133は先端と片方の脚を欠く。刃部調整は粗い。134は剥片錐であるが、刃部調整が粗い。

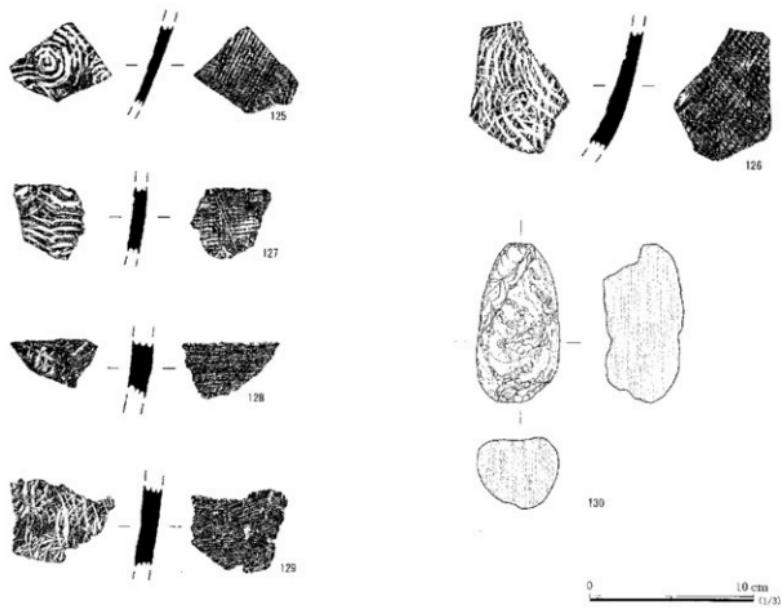


Fig.33 遺構面出土遺物実測図② (縮尺1/3・1/1)

第4章 まとめ

調査対象地周辺は昭和55年に行われた福岡市営圃場整備のため3haに及ぶ地形区画の変更が行われており、表土除去後の状況では、西側台地部分の削平が著しく、遺構の遺存状況は良好ではなかった。

地形的には博多湾へ向かってのびる飯倉丘陵から東側七隈川の方向に小さく突き出した標高22.4m～22.6mを測る台地上に立地する。現状では台地の先端部と当該地の比高差は、約0.6mの落差がある。元来は段丘状の地形を呈していたものと考えられる。事前の試掘調査では、七隈川に接した台地先端部の標高20.8mを測る低地においては遺構を発見できなかったが、東側対岸の第3次調査では、標高20.0mを測る段丘先端部において自然堤防に囲まれた古代から近世までの水田跡を発見していることから、当該地周辺低地においても水田遺構の存在は検討されるべきであろう。

また、調査区東側には梅林中学校が存在するが、この学校の立地は飯倉丘陵より東側に開口した小谷を埋め立てて建設されたものであるから谷内に水田遺構が存在する可能性は高い。また、発見した集落遺構は台地先端まで分布するものと考えられ、調査区東側の道路敷き面まで遺構面が存在することも肯綮できる。しかしながら、調査対象予定地の北側約10m²については事前の試掘調査によって繊層が表出したためFig.36に示した様に「旧河道の一部として遺構の存在はない」と判断し、発掘調査対象範囲から除外された。しかし、今回の調査によって古墳時代の樹跡のがることなどから遺構存在の可能性は否定できない。

発掘調査によって発見した遺構・遺物は以下のとおりである。

1. 繩文時代後期 墓壙2基 ※遺存状態は悪い。
2. 古墳時代 壺穴住居跡3軒 ※削平のため遺存状態は悪い。内1基は未調査。
3. 古墳時代～奈良時代 据立柱建物跡 3棟 削平のため遺存状態は悪い。
4. 古墳時代～奈良時代 横跡 1条、溝 1条
5. 奈良時代 整地層 ※削平のため遺存部分は東側に限られた。

古墳時代の壺穴住居跡は、第2次調査で検査した6世紀中～後半の壺穴住居跡と時期・規模・構造を同一とするものである。壺穴住居跡形状は長方形を呈し、長辺のはば中央に竈を敷設しているもので、発掘調査した2カ所の壺穴住居跡は、いずれも竈を二回り直している。また壁に沿って周溝を巡らしているが、当初の竈は周溝壁まで火床が及んでいるが、背面壁に排煙装置が存在しない。しかし、作り直した2度目の竈は竈背部の周溝を埋めて構築し、かつ煙道を背後の壁面を抉り込んで設けている。特徴的なのは2号住居跡において北西隅角部分に台地高台方向に煙道を設けていることである。第2次調査においても壺穴住居跡SC 02・06に同様例がある。

横跡と考えられる2本の並び柱は、東西・南北方向に矩形に曲がるもので、平行する柱間隔や、柱筋がきちんと通っていないことから横跡と判断したが、据立柱建物跡を回繞するのか、古墳時代住居跡を区画する横跡であるのか現状では判断できない。

また、壺穴住居跡SC 02には西側を囲むように建物が存在するが、壺穴住居跡の構造上に係る遺構と考えることも可能である。

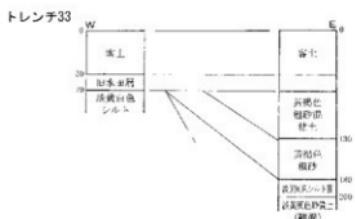


Fig.34 梅林遺跡第1～6次調査遺構配置図（縮尺1/800）



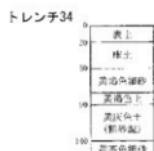
Fig.35 明治33年梅林遺跡周辺地形図（縮尺1/30,000）

試掘トレンチ



〔所見〕

東側は旧河道となる。西側の微高地上においても遺構は未検出。



※単位：cm

〔所見〕

トレンチ33で確認した旧河道に含まれるものとも考えられる。

Fig.36 試掘トレンチ上層図（模式図）

梅林道路第1～5次調査地点と外環状道路
(東から)

国土交通省



梅林道路第4次調査地点



Tab. 3-① 梅林遺跡第4次調査出土遺物一覧表

(単位: cm)

埋蔵番号	遺物番号	器原番号	出土場所	種類	器形	口径	底径	高さ (高台径) (現存高)	形態の特徴・調査・文様	施釉・色調・焼成等	備考
10 1	00001	SX01	測定上部	鉢	口縁	18.8	7.0	—	口縁部と底部。外面は不整方向の粉々アリ調査。一部に朱痕が残る。内面はナデ調査。	胎土に2~3mmの灰色の砂粒と白色の微細粒を多く含む。焼成良好。外面は暗赤褐色。内面は灰褐色。	粗製土器 後期~中期
10 3	00006	SX02	測定上部	鉢	—	—	—	(18.7)	口縁一部断片。外面に茶痕が残る。口縁部内面はココナツ、腹部内面は浅い波状のナデ調査。	胎土に1mm前後の白灰色の砂粒を多く含む。焼成良好。黒灰。	粗製土器 後期~中期 上部
10 4	00007	SX03	測定上部	鉢	—	—	—	(23.0)	肩部。外面はタケ方向の茶痕。内面はヨコナデ調査。一部に擦痕。	胎土に2mm前後の灰色の砂粒を多く含む。焼成良好。青灰。	粗製土器 後期~中期 上部
16 5	00012	SC01 尾端	土師器	甌	—	14.8	—	(4.3)	肩部外側にヨコ方向のハケナガ課題。内面はハツケズリ調査。口縁部外側はナデ調査。内面はナデ調査。	胎土に1mm前後の白色の砂粒を多く含む。焼成ややあまい。灰系色。	粗製土器 後期~中期 下部
16 6	00011	SC01	土師器	甌	环	14.8	—	(3.3)	口縁部。内外面ナデ調査。	胎土は精良で、胎殻色の線めを少し含む。焼成良好。淡灰褐色。	—
16 7	00014	SC01 腹	土師器	甌	—	16.6	—	(9.6)	肩部外側はハケ後、ナデ調査。口縁部内面はヨコ方向のハケナガ。腹部内面はナツケズリ調査。	胎土に白・灰褐色の砂粒を多く含む。焼成良好。青灰褐色。	外向一部器底
16 8	00016	SC01 腹	土師器	甌	—	—	—	(8.2)	口縁部と底部をぐく。外面は極度に凹凸。内面はヨコナデ調査。	胎土に3mm前後の白色の砂粒を多く含む。焼成良好。青灰。	—
16 9	00015	SC01 上唇部	土師器	甌	—	—	—	(11.8)	外周はタケ方向のハケ目。内面はナツノ方向のハツケズリ調査。	胎土に3mm前後の灰色の砂粒と微細粒を含む。焼成良好。淡灰褐色。	—
16 10	00013	SC01 尾端	土師器	甌	—	—	—	(6.7)	外面ナデ調査。	胎土に白・灰褐色の砂粒を多く含む。焼成良好。青灰。	二次火を受けた 外向一部器底
16 11	00024	SC01 尾端	須志器	环甌	—	11.0	—	3.4	口縁部をやや外につまみ出す。内外正反屈ナデ調査。外面天井部は右側のみのハツケズリ調査。	胎土に2~3mmの白色の砂粒と微細粒を多く含む。焼成良好。黒灰。	完形品
16 12	00023	SC01 尾端	須志器	环身	—	12.2	5.5	4.0	口縁部の立ち上がりはやや内傾する。内面は環屈ナデ調査。外面天井部は左回りのハツケズリ調査。	胎土に1~3mmの灰・褐色の砂粒を含む。焼成良好。青灰。	1/3現存
16 13	00017	SC01	須志器	环身	—	12.4	—	(2.6)	口縁部の立ち上がりは直立し、直受け式平底。内面は環屈ナデ調査。外面天井部はヘラケズリ調査。	胎土に白色の砂粒を多く含む。焼成良好。淡灰褐色。	—
16 14	00019	SC01	須志器	环身	—	—	—	(2.7)	口縁部。口縁部内側に浅い波状がめぐる。内外面屈屈ナデ調査。	胎土に白色の砂粒を含む。焼成良好。青灰。	—
16 15	00020	SC01	須志器	环身	—	—	—	(3.0)	口縁部。内外面ナデ調査。	胎土に白色の微細粒を含む。焼成良好。淡灰褐色。	—
16 16	00022	SC01	須志器	环身	—	—	—	(1.6)	口縁部。口縁部内側のかえりは小さい。内外面屈屈ナデ調査。	胎土に白・灰褐色の微細粒を含む。焼成良好。小。	—
16 17	00021	SC01	須志器	环身	—	—	—	(2.5)	口縁部。内外面ナデ調査。	胎土は精良。焼成良好。淡灰褐色。	—
16 18	00018	SC01	須志器	体	—	15.0	—	(5.1)	口縁部。口縁部はやや外につまみ出される。内外面屈屈ナデ調査。	胎土に白色の微細粒を含む。焼成良好。青褐色がかった墨黒灰色。	—
18 23	00035	SC02 (E+eF (Pm))	土師器	甌	—	15.8	14.6	35.1	外周はタケ・ナツメ方向のハケ目調査。内面は、口縁部はヨコナツ、腹部はナツメ・アツカ方向のテヌリ。底面はナツノ方向が残る。	胎土に白・灰褐色の微細粒を多く含む。焼成良好。青灰褐色。	2/3現存 外向保有者
18 24	00037	SC02	土師器	甌	—	17.2	—	(5.4)	口縁部。口縁部外側はナデ調査。腹部外側はハツケズリ調査。内面はナデ調査。	胎土に微細粒を多く含む。焼成あまい。灰青色~灰黒色。	—
18 25	00034	SC02 通透部	土師器	甌	—	14.0	—	(7.2)	底部。外周はハケ後、ナデ調査。内面はヘラケズリ調査。	胎土に2~3mmの灰色の砂粒と微細粒を多く含む。焼成良好。灰青褐色。	外向二次火を受けた

Tab. 3-② 梅林遺跡第4次調査出土遺物一覧表

(単位: cm)

番号 器名 番号	分類 器名	出土 状況	標記	属性	口径 (底径) (底厚)	器高 (底存高)	形態の特徴・測定・文様	施釉・色調・系地等	備考
18 26 00031 SC02 上彌器 壺					14.6		(5.0) 口縁部片。内外面凹テ調査。	粘土に白、灰灰の微砂粒を含む。焼成良好。灰灰褐色。	
18 27 00041 SC02 瓶彌器 壺兼					15.4		(4.5) 口唇部内側に段をなす。内外面凹テ調査。外腹大井部はヘラケメリ。	粘土に白色の微砂粒を多く含む。焼成良好。墨灰色。	
18 28 00058 SC02 瓶彌器 壺身					11.9		口縁部の内側に段をなす。内外面凹テ調査。外腹大井部は左肩よりの削れ付テ調査。	粘土、微砂粒と3mm前後の白灰の砂粒を少し含む。焼成良好。青灰色。	1/4現合
18 29 00040 SC02 瓶彌器 壺兼					14.0		口唇部内側に浅い沈線をめぐる。内外面凹凸付テ調査。外腹大井部は右肩よりのヘラケメリ。	粘土に白、灰灰の微砂粒を多く含む。焼成良好。墨灰青色。	
19 30 00043 SC02 瓶彌器 壺兼							口縁部片。口唇部内側に浅い沈線をめぐる。内外面凹凸付テ調査。	粘土に1~2mmの白色の砂粒を少し含む。焼成良好。灰灰褐色。	
19 31 00042 SC02 瓶彌器 壺兼							口縁部片。口唇部内側に段をなす。内外面凹凸付テ調査。	粘土に墨色の微砂粒を含む。焼成良好。灰灰色。	
19 32 00049 SC02 須志器 壺身							口縁部片。口唇部内側に段をなす。内外面凹凸付テ調査。	粘土に白色の微砂粒を多く含む。焼成良好。墨灰青色。	
19 33 00056 SC02 須志器 壺							外面に削り目が見られる。内面はナガ調整。	粘土に白色の砂粒を多く含む。焼成良好。青灰色。	
19 34 00009 SC02 須志器 壺身							口縁部片。立ち上がりが内傾し、器受け部に内傾がある。内外面凹凸付テ調査。	粘土は墨直で、微砂粒を含む。焼成良好。灰灰色。	
19 35 00050 SC02 北箭 須志器 壺身							口縁部片。内外面凹凸付テ調査。	粘土は墨直。微砂粒を含む。焼成良好。灰灰色。	ホホ計
19 36 00044 SC02 須志器 壺身							口縁部片。底部との境に段を有する。内外面凹凸付テ調査。	粘土に白、灰灰の微砂粒を含む。焼成良好。墨灰色。	
19 37 00045 SC02 須志器 壺身					10.0	(3.3)	脚部片。内側の途中に粗加工があり。内外面凹凸付テ調査。	粘土に白、墨色の砂粒を多く含む。焼成良好。墨灰褐色。	
19 38 00048 SC02 須志器 壺							側面部。外腹は平行叩き。	粘土は精良。焼成良好。青灰色。	
19 39 00052 SC02 北箭 須志器 壺							側面部。外腹は擬似捺子目叩き。内面は同心円の當て具足。	粘土は精良。焼成良好。外腹は灰色。内面は墨小豆色。	
19 40 00047 SC02 須志器 壺							脚部片。外腹は捺子目叩き。内面筋に白色の砂粒を含む。施釉ややあり。青褐色の当て具足。	粘土に白、墨色の砂粒を含む。焼成ややあり。墨灰褐色。	赤透け土器
25 44 00082 SB01 P.10 土師器 壺					14.2		(6.6) 外腹はヨココテア。内面は指擦痕。筋上は粗く、1~2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。灰褐色。		覆底
25 45 00061 SB01 P.2 土師器 壺							口縁部片。内面に粗擦痕が残る。	粘土に1mmの砂粒を含む。焼成良好。内面は灰褐色。	口縁部片。内面は粗擦痕。
25 47 00063 SB01 P.10 須志器 壺身							(3.9) 口縁部片を欠く。内外面凹凸付テ調査。粘土に1mmの砂粒を少し含む。焼成良好。	燒成ややあり。灰灰色。	内外面密接
25 48 00061 SB01 P.2 須志器 壺身					11.4		(3.2) 口縁部片立ち上がりは内傾し、重受け部に内傾がある。内外面凹凸付テ調査。	粘土に白灰がめぐる。内外面凹凸付テ調査。	
25 49 00067 SB02 P.2 須志器 壺身					12.2		(3.0) 口縁部片。口唇部内側に浅い沈線。粘土に1mm前後の砂粒を含む。焼成やめぐら。内外面凹凸付テ調査。	焼成ややあり。灰灰色。	

Tab. 3-(3) 梅林遺跡第4次調査出土遺物一覧表

(単位: cm)

標図 番号	実物 番号	登録 番号	出土 遺物	種類	器種	口径	底径 (高さ)	深さ (保存高)	形態の特徴・調査・文様	諸説・色調・墨色等	備考
25	50	00066	SB02 P 1	須恵器	小壺	4.5	14.5	(2.7)	口縁部片。内外面凹凸ナメ調。外腹大井部はハラケズリ。	粘土に1mmの砂粒を僅かに含む。焼成良好。暗灰褐色。	
28	51	00071	SA01 P 13	須恵器	壺		6.2	(2.4)	底部付。やや上げ底。内外面指ナメ調。指紋压痕が残る。	粘土に1~2mm、4~5mmの砂粒を含む。焼成良好。外腹は薄灰色、内腹は暗褐色。	表面一部剥離
28	52	00073	SA01 P 14	須恵器	小壺	4.4		(2.4)	口縁部片。内外面凹凸ナメ調。	粘土は細かい。1mmの砂粒を少し含む。焼成度あまい。茶褐色。	赤褐色土器
28	54	00075	SA01 P 15	須恵器	壺	12.2		(3.7)	内外面凹凸ナメ調。外腹大井部はハラケズリ。ハラケズリがみられる。	粘土に1~3mmの砂粒を含む。焼成良好。外腹は灰褐色、内腹は灰褐色。	ヘラ記号
28	55	00075	SA01 P 15	須恵器	壺身	9.3		(3.7)	口縁部立ち上がりは内側し、垂受け部は平底。内外面凹凸ナメ調。外腹大井部はハラケズリ。	粘土は細かい。砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰白色。	火焔穴あり
28	56	00076	SA01 P 15	須恵器	壺				外腹は擬似指子目印き。内腹は青海波の当て直裏。	粘土は細かく、1~2mmの砂粒を僅かに含む。焼成良好。暗灰色。	
29	57	00081	SP01	須恵器	壺				口縁部付。口縁部は外反し、ナメ調藍。	粘土に0.5mm前後の微砂粒を含む。焼成度あまい。灰褐色。	
29	58	00082	SA02	土師器	壺				口縁部付。口縁部は外反し、ナメ調藍。	粘土に1~2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。灰褐色。	
29	59	00083	SP124	須恵器	小壺				口縁部付。口唇部内側に垂受けがある。内外面凹凸ナメ調。	粘土は粗糲。砂粒を僅かに含む。焼成良好。暗灰褐色。	
29	60	00105	東甕鏡 トレンチ	土師器	壺		5.7	(1.2)	底部片。外腹側ナメ調。貼り付け窓有。	粘土は細かく、1mmの砂粒を含む。焼成度あまい。灰褐色。	
29	61	00109	南甕鏡 トレンチ	須恵器	小壺	11.6			口縁部片。口唇部内側に折線がある。体部との間に明瞭な段をなす。内外面凹凸ナメ調。	粘土は細かく、0.5~1mmの微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
29	62	00101	東甕鏡 トレンチ	須恵器	小壺	10.8		(3.8)	口縁部立ち上がりは内側する。内外面凹凸ナメ調。外腹大井部は右側の肩部へハラケズリ。	粘土に1~5mmの砂粒を多く含む。焼成良好。外腹は暗褐色、内腹は灰褐色。	
29	63	00102	東甕鏡 トレンチ	須恵器	高杯	13.0		(3.2)	口縁部片。内外面凹凸ナメ調。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。暗褐色。	
29	65	00110	南甕鏡 トレンチ	須恵器	壺	20.0			口縁部付。内外面ナメ調。	粘土に砂粒と砂塊を含む。焼成度あまい。灰褐色。	
29	66	00103	東甕鏡 トレンチ	須恵器	壺				外腹は折子目印き。内腹は同心円の当て直裏。	粘土に1mmの砂粒を含む。焼成良好。灰白色。	
29	67	00105	東甕鏡 トレンチ	須恵器	壺				外腹は擬似指子目印き。	粘土は細かい。焼成良好。外腹は灰褐色、内腹は灰褐色。	
29	68	00108	東甕鏡 トレンチ	須恵器	壺				内腹は青海波の当て直裏。	粘土に1~3mmの砂粒を含む。焼成良好。外腹は暗灰褐色、内腹は灰褐色。	
29	69	00107	東甕鏡 トレンチ	須恵器	壺				外腹はヨコナメ。内腹は茎子印き後、ナメ調。	粘土に1mmの砂粒を含む。焼成度あまい。灰褐色。	
29	70	00093	壺	須恵器	壺			(2.5)	口縁部を欠く。内外面凹凸ナメ調。	粘土は細かい。0.5mmの微砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰褐色。	
29	71	00092	壺	須恵器	壺		7.0	(1.2)	底部片。内外面凹凸ナメ調。体部との間に明瞭な段をなす。貼り付け窓有。	粘土は細かい。砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰褐色。	

Tab. 3-④ 梅林遺跡第4次調査出土遺物一覧表

(単位: cm)

件番 番号	遺物 番号	骨組 番号	出土 遺構	種類	器種	口径	底径 (高台径)	表面 (既存高)	毛刷の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
29	72	00091	複数	須恵器	壺				外面は格子目印き。内面は平行当て具板。	胎土に1mmの砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
29	73	00095	複数	須恵器	壺				外面は格子目印き。	胎土に1~3mmの砂粒を僅かに含む。焼成やや不良。灰褐色。	
29	74	00096	複数	須恵器	壺				外面は格子目印き。内面は同心円の当て具板。	胎土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。外側は灰白色、内面は灰褐色。	
29	75	00097	複数	須恵器	壺				外面は擬似格子目印き。内面は青釉の当て具板。	胎土に0.5mmの微砂粒と5mmの砂粒を含む。焼成良好。外側は灰褐色、内面は灰褐色。	
30	76	00128	包含層	土器部	支脚			(6.6)	外面はナガテ調整。断面に直ぐ吸い込み。内面はタク方向のナガ調整。	胎土はやや粗く、白色の微砂粒を僅かに含む。焼成やや不良。灰褐色。	
30	77	00129	包含層	須恵器	环身	12.9		(2.6)	口縁部片。口縁部立ち上がりにやや内傾する。内外面回転ナガ調整。	胎土は細かい。焼成良好。灰褐色。	
30	78	00133	包含層	須恵器	环		10.0	(1.4)	底面部片。内外面回転ナガ調整。貼り付け窓台の断面形はコの字形。	胎土は細かい。0.5mmの微砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰褐色。	
30	79	00132	包含層	須恵器	环		9.8	(1.6)	底面部片。内外面回転ナガ調整。貼り付け窓台の断面形はコの字形。	胎土は細かい。焼成良好。外側は灰褐色、内面は青灰色。	
30	80	00131	包含層	須恵器	环		9.2	(1.4)	底面部片。内外面回転ナガ調整。貼り付け窓台の断面形はコの字形。	胎土は細かく、砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
30	81	00130	包含層	須恵器	环		8.0	(1.7)	底面部片。内外面回転ナガ調整。貼り付け窓台の断面形はコの字形。	胎土に1mmの砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
30	82	00137	包含層	須恵器	环盤	13.3		(1.2)	内外面回転ナガ調整。外面天井部はハラケスリ。	胎土に0.2~1mmの微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
30	83	00140	包含層	須恵器	环盤	12.6		(1.3)	内外面回転ナガ調整。	胎土は細かい。焼成やや不良。灰褐色。	
30	84	00138	包含層	須恵器	环蓋	11.6		(0.9)	内外面回転ナガ調整。外面天井部はハラケスリ。	胎土に微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
30	85	00144	包含層	須恵器	环蓋 つまみ			(0.6)	内外面回転ナガ調整。つまみは平坦な擬宝珠形。	胎土に0.5~1mmの微砂粒を含む。焼成やや不良。灰褐色。	
30	86	00145	包含層	須恵器	环蓋 つまみ			(1.3)	内外面回転ナガ調整。つまみは擬宝珠形。	胎土に0.5~2mmの微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	
30	87	00143	包含層	須恵器	环盤 つまみ			(1.6)	内外面回転ナガ調整。つまみは擬宝珠形。	胎土は細かく、0.5mmの微砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰褐色。	
30	88	00148	包含層	須恵器	瓶				口縁部片。口縁部は外反する。内外面ココナガ調整。	胎土に2mmの砂粒を含む。焼成良好。外由口部灰化。内面は灰褐色。	
30	89	00149	包含層	須恵器	瓶				内面は青海波の当て具板。	胎土に微砂粒を多く含む。焼成良好。暗灰色。	
30	90	00153	包含層	須恵器	瓶				外面は格子目印き。内面は青海波の当て具板。	胎土に1mmの砂粒を含む。焼成良好。青灰色。	
30	91	00155	包含層	須恵器	瓶				外面は格子目印き。内面は青海波の当て具板。	胎土に1mmの砂粒を僅かに含む。焼成良好。灰褐色。	

Tab. 3-(5) 梅林遺跡第4次調査出土遺物一覧表

(単位: cm)

器物番号	遺物番号	登錄番号	出土場所	種類	基盤	口径	底径 (高台径)	器高 (現存高)	形態の特徴・調査・支柱	施作・色調・素地等	備考
30	92	00152	包含層	頭巾器	漆				外側は格子目叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土に0.5~3mmの砂粒を含む。焼成良好。灰青色。	
30	93	00154	包含層	頭巾器	漆				外側は叩き後、ハケナダ。内面は青漆液の当て具組。	胎土に0.5~1mmの砂粒を含む。焼成良好。暗灰青色。	
31	94	00113	壁地層	土器類	灰 把手	長径 5.2		厚み 3.2	接合は貼り付け。全体にナテ調節。	胎土に2mm前後の灰色の微砂粒を多く含む。焼成良好。暗赤褐色。	
31	95	00114	壁地層	瓦質土器			12.0		(1.2) 内外面ナテ調整。	胎土は精良。焼成ややまろい。灰色。	
31	96	00125	壁地層	頭巾器	漆				外側は多子目叩き。内面は青漆液。胎土に白色の微砂粒を含む。焼成良好。灰色。		
31	97	00127	壁地層	頭巾器	漆				外側に格子目叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土は精良。白色の微砂粒を僅かに含む。焼成良好。暗灰褐色。	
31	98	00128	壁地層	頭巾器	漆				外側は擬似格子目叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土に白色の微砂粒を含む。焼成良好。外側は淡墨灰色、内面は青灰色。	
31	99	00119	壁地層	頭巾器	漆				外側は格子目叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土は精良。焼成やまろい。外側は灰褐色、内面は淡茶灰褐色。	年焼付
31	100	00124	壁地層	頭巾器	漆				外側は格子目叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土は精良。焼成良好。灰褐色。	
31	101	00126	壁地層	頭巾器	漆				外側は格子目叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土は精良。焼成良好。灰褐色。	
31	102	00120	壁地層	頭巾器	漆				外側は平行叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土は精良。焼成良好。墨小豆色。表面付上漆	
31	103	00118	壁地層	頭巾器	漆				外側は格子目叩き。内面は青漆液の当て具組。	胎土に白色の微砂粒を多く含む。焼成良好。灰褐色。	
31	104	00115	壁地層	頭巾器	漆				外側は平行叩き後、ナテ消し。内面は同心円の当て具組。	胎土に白色の微砂粒を多く含む。3mmの灰褐色の砂粒を僅かに含む。焼成良好。外側は墨褐色、内面は灰褐色。	
31	105	00117	壁地層	頭巾器	漆				内外面ヨコナタ調節。	胎土に白色の微砂粒を多く含む。焼成良好。墨褐色。	
31	107	00121	壁地層	頭巾器	漆				内面はタチ方柄のハケナダ調節。内面にはほかに青漆液の当て具組。	胎土は精良。焼成良好。青褐色。	
32	108	00161	遺構面	土動器	灰 把手	長径 3.8	厚み 3.4	接合は貼り付け。全体にナテ調節。	胎土に1~3mmの砂粒を多く含む。焼成良好。黄褐色。		
32	109	00165	遺構面	頭巾器	漆			(3.0)	は鉛錠と瓦井筋の一部を灰く。移設との間に縫をなす。内外面回転ナテ調節。外側瓦井筋はヘラクスリ。	胎土に1~3mmの砂粒を含む。焼成ややまろい。暗灰褐色。	
32	110	00171	遺構面	頭巾器	漆			(1.3)	内外面回転ナテ調節。外側瓦井筋はヘラクスリ調節。	胎土に0.5~2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。灰褐色。	
32	111	00169	遺構面	頭巾器	漆		9.0	(2.0)	底部片。内外面回転ナテ調節。貼り付け高さ。	胎土は細かく、0.5mmの微砂粒を僅かに含む。焼成良好。暗灰褐色。	
32	112	00170	遺構面	頭巾器	漆		6.7	(1.8)	底部片。内外面回転ナテ調節。貼り付け高さ。	胎土は粗かく、1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。灰褐色。	

Tab. 3-⑥ 梅林遺跡第4次調査出土遺物一覧表

(単位: cm)

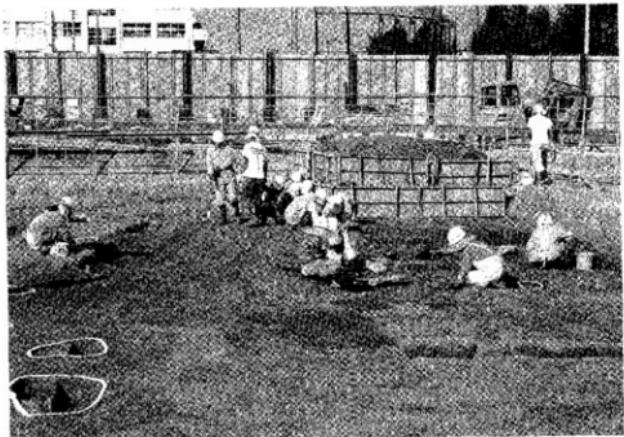
件名 番号	遺物 番号	分類 番号	出土 遺構	種類	器種	目付	量器 (高台付) 底付高	形態の特徴・調査・文書	施錠・色調・変遷等	備考
32 113	00172	遺構面	須恵器	壺	つまみ		(1.6)	内外面凹凸少く調査。つまみは鋸歯形。	船土に鐵砂粒を含む。焼成良好。灰青色。	
32 114	00173	遺構面	須恵器	壺	つまみ		(1.2)	外側面凹凸少く調査。つまみは平肩な鋸歯形。	船上は縦かい。焼成良好。灰色。	
32 115	00175	遺構面	須恵器	壺				外面ヨコハケ調査。内面はナガ調査。	船土は細かく、砂粒を少し含む。焼成良好。灰青色。	
32 116	00180	遺構面	須恵器	壺				外側に波状文。内面はナガ調査。	船土に細かく、1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。灰青色。	
32 117	00182	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は直波状の当て具微。	船土は細かく、0.5~2mmの砂粒を含む。焼成堅敏。外側は暗灰色、内面は青灰色。	
32 118	00184	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は直波状の当て具微。	船上に1mmの砂粒を少し含む。焼成良好。外側は暗灰色、内面は灰色。	
32 119	00195	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。	船土は縦かい。焼成ややあまい。灰色。内側堅敏。	
32 120	00197	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は直波状の当て具微。	船土は縦かい。焼成良好。灰色。	
32 121	00191	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は直波状の当て具微。	船土は縦かい。焼成良好。外側は灰白色、内面は灰褐色。	
32 122	00183	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は直波状の当て具微。	船土は縦かく、砂粒を極めに含む。焼成厚壁。青灰色。	
32 123	00188	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は同心円の当て具微。	船土は縦かい。焼成堅敏。外側は灰褐色、内面は灰色。	
32 124	00187	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は同心円の当て具微。	船土は縦かく、砂粒を極めに含む。焼成良好。外側は直波状の当て具微。	
33 125	00181	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は同心円の当て具微。	船土に0.5~2mmの砂粒を極めに含む。焼成良好。灰褐色。	
33 126	00192	遺構面	須恵器	壺				外側は格子目叩き。内面は直波状の当て具微。	船土は縦かい。焼成良好。灰白色。	
33 127	00182	遺構面	須恵器	壺				外側は直波状の格子目叩き。内面は直波状の当て具微。	船土は縦かい。焼成やまい。灰白色。	
33 128	00185	遺構面	須恵器	壺				外側は平行叩き。内面は直波状の当て具微。	船上に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。暗灰色。	
33 129	00186	遺構面	須恵器	壺				外側は叩き後、ハケナダ。内面は直波状の当て具微。	船上に0.5~1mmの微砂粒を含む。焼成良好。暗灰色。	

Tab. 4 梅林遺跡第4次調査出土石製品一覧表

博物館番号	遺物番号	登録番号	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	石材	特徴
10	2	01049	自然石	SX02	6.3	6.1	4.3	219	花崗岩	下端深鉤底に充填
17	19	01003	石鏃	SC01	5.1	2.25	0.6	7.3	サスカイト	枝縫やや明顯。抉りなし。
17	20	01004	石鏃	SC01	2.3	1.8	0.6	2.4	黒曜石	抉りなし。
17	21	01005	石鏃	SC01	2.1	1.3	0.2	0.5	黒曜石	抉りあり。
17	22	01001	—	SC01	(14.0)	(4.7)	(2.0)	90	—	剥離片、欠損部多い。
19	41	01028	石輪	SX06櫛内ピット	9.1	3.2	0.9	29.5	玄武岩	両端欠。
19	42	01013	謙	SC02	6.8	3.4	0.6	32	融泥石片岩	自然露呈石利用
19	43	01012	石鏃	SC02	1.65	1.4	0.3	0.5	サスカイト	完形。抉りあり。
25	46	01021	石鏃	SB01-P 3	3.1	1.8	0.55	1.8	黒曜石	抉りなし。
28	53	01016	ナイフ	SA01-P 3	2.1	1.3	0.4	0.9	黒曜石	—
29	64	01028	コア	東壁攝トレンチ	2.6	2.1	1.1	9.5	黒曜石	棱鏡明瞭。
31	105	01031	石鏃	些集層	1.6	1.7	0.3	0.6	黒曜石	木製品。
33	130	01048	砾石 (石頭)	造形面	9.6	4.8	4.3	330	花崗岩	使用痕が見られる。 石頭としての使用例あり。
33	131	01046	石鏃	造形面	2.0	0.9	0.5	0.9	チャート	破片。輝か?
33	132	01039	石鏃	造形面	2.4	1.1	0.4	0.9	黒曜石	抉りあり。先端欠。
33	133	01040	石鏃	造形面	2.0	1.3	0.4	0.7	黒曜石	先端部は緑色。
33	134	01045	石鏃	造形面	2.0	1.4	0.2	0.7	黒曜石	先端部は緑色。

外環状道路関係発掘調査報告書一覧

1. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書－1－福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡第2次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第467集 福岡市教育委員会 1996年
2. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－2－福岡市早良区賀茂所在次郎丸高石遺跡第3次調査・免遺跡第2次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第536集 福岡市教育委員会 1997年
3. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－3－福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡第2次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第535集 福岡市教育委員会 1997年
4. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－4－福岡市早良区賀茂所在野芥大森遺跡第1次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集 福岡市教育委員会 1998年
5. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－5－福岡市西区橋本一丁山遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第582集 福岡市教育委員会 1998年
6. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－6－福岡市早良区野芥所在野芥遺跡群第5次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第609集 福岡市教育委員会 1999年
7. 「井相田D遺跡第2次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第610集 福岡市教育委員会 1999年
8. 「梅林遺跡第1次調査－一般国道202号福岡外環状道路、及び福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第648集 福岡市教育委員会 2000年
9. 「梅林遺跡第2次調査－一般国道202号福岡外環状道路、及び福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査2－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第660集 福岡市教育委員会 2001年
10. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－10－福岡市博多区諸岡所在佐原遺跡群第3次調査・板付所在・筑遺跡群第3次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第662集 福岡市教育委員会 2001年
11. 「外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書11 高畠遺跡第17次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第676集 福岡市教育委員会 2001年
12. 「梅林遺跡第3次調査－一般国道202号福岡外環状道路、及び福岡市営地下鉄3号線建設に伴う発掘調査3－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第698集 福岡市教育委員会 2002年
13. 「外環状道路関係文化財発掘調査報告書13 高畠遺跡第18次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集 福岡市教育委員会 2002年
14. 「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－14－七隈占墳群C 一号墳・野芥遺跡第10次・飯倉G遺跡第4・5次」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第700集 福岡市教育委員会 2002年
15. 「外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書15 井相田D遺跡－第1・3次調査－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第701集 福岡市教育委員会 2002年
16. 「外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書16 梅林遺跡4－第6次調査－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第739集 福岡市教育委員会 2003年



作業風景

梅林遺跡 第4次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第781集

2003年（平成15年）12月25日

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
電話（092）711-4667

印 刷 城島印刷有限会社
福岡市中央区白金二丁目9-6
電話（092）531-7102

